吉蔵撰『涅槃経遊意』国訳

平井俊榮

はしがき

『涅槃経遊意』一巻は隋の嘉祥大師吉蔵（五四九―六二三）の撰述で『南本大般涅槃経』三六巻の要旨を概説したものである。現在大正大蔵経（巻第三八・二三〇―二三九頁、No. 1768）と大日本続蔵経（第一輯・第五六套・第二冊・一四〇―一四九丁）に収められている。吉蔵の涅槃経に関する註疏としては他に『大般涅槃経疏』二〇巻が存したことが経録に伝えられているが、今日現存していない。しかし日本南都の三論宗の間では、少くとも鎌倉時代頃までは伝えられて研究された形跡があり、筆者はかつてその逸文の一部を集録再構成して発表したことがある（吉蔵著『大般涅槃経疏』逸文の研究―「南都仏教」第二七号・第二九号）。南都の三論学者の間ではむしろ今日欠本のこの『義疏』の方が二〇巻という大部の著述でもあり、精緻を極めた論書でもあったために盛んに引用研究せられたようである。それに比べると現存の『遊意』は一巻という小部のものでもあり、達意的に過ぎるせいか比較的引用されることも少なく、むしろ日本三論学者の間ではあまり珍重されることがなかったようである。そのせいか流布した刊本の存在も知られず、現存蔵経の底本となったと思われる二三の写本が存するだけである。筆者はその中竜谷大学所蔵の写本（竜大・No. 2416-16）についてはこれを校覧することができたが、他に京都大学と高野山大学所蔵のものがあり、後者は徳川末期のものである。

吉蔵は本書の冒頭で、「余昔経注録文疏零失。今憶者十不レ存レ一。因茲講以聊復疏レ之。」と執筆の動機を語っているが、ここで昔注録の文疏を零失したといっているのは、これが前述の涅槃経疏二〇巻を指すものかどうか必ずしも断定できないとし

ても、吉蔵自身、自撰の註疏の散逸を認めていることは注目される。また本書の末尾に恐らく写者の後書と思われる一文が戴っているが、そこで「道融先於二江南会稽一遊学聞二彼大徳等一云。其吉蔵法師涅槃疏記等百済僧並将帰レ郷。所以此間無二本留行一。」といっているのは、吉蔵の先の回顧と符合するものである。また前文に涅槃疏記等といっているのは、涅槃経疏のみならず、本書もまた当時の中国江南の学界に欠けていたことを示唆するものであろう。これが何時頃のことを指すのか、道融の伝記が不詳なので判然としないが、後書はさらに続けて、「年過見三百済賢者持二此吉蔵法師涅槃玄意一。行二故郷一写レ之二一。有レ疏而未レ得レ読。乃写其賢者在二彼訓一」といっており、本書が百済僧の手を経てつとに日本南都に伝承されたことが伺われる。散逸した義疏も、またこの遊意も中国ではあまり流布することもなく日本へ渡ったのであろうか。道宣が吉蔵伝でその著述について述べた件りで、涅槃経に関しては全く言及していないのは或いはそのせいでもあろうかと思われる。

本書はわずか一巻の小部の論ではあるが、吉蔵の述懐にもあるように恐らく吉蔵最晩年頃の著述と思われ、三論の立場からする涅槃観を知る上で欠くことのできないものである。全篇は㈠大意。㈡宗旨。㈢釈名。㈣辨体。㈤明用。㈥料簡の六章から成っており、従来主に江南の涅槃師、成論師等が、涅槃常住といわれるような「常住」を以てこの経の宗旨とみなしたのに対し、「無所得」を以て一経の宗旨であるといい、これがたんに、涅槃経一経の宗旨を宣明するのみにあらず、通じて一切大乗の正意であることを種々の角度から論じたものである。

国訳にあたっては現行の蔵経所収の原本の校訂がすこぶる不充分で意味不明の箇所にしばしば遭遇した。これは筆者の学力不足にもよるが、前述の如く南都三論宗においてあまり研究されることもなかったために、最初の書写の誤りがそのまま収録されて今日に至っているためであろう。あえて不備な定本と取組んで国訳を試みた意図は、先の涅槃経疏逸文の再構成とならべて、吉蔵の涅槃経研究の軌跡を伺う上での基礎的な資料とするためであり、その意味でも本国訳はあくまで筆者の習作であるに過ぎない。

涅槃経遊意

序章

沙門　吉蔵　撰

此の経に就いて南北の二本有り、広略同じからず。北方は旧本に或いは三十三、或いは三十なる者有り。[1] 品は唯十三のみ有り。南土の文は巻は三十六有り。二十五品有り。其の間文義浩博にして豈詳しく写す可けんや。故に経[2]に云く、一恒二恒にして始めて髣髴として之を見る。三恒四恒にして乃ち能く一分の義を知る、と。梁の武皇帝云く、[3] 涅槃は義万善より高く、事百非を絶す。空空として其の真際を測ること能わず。玄玄として其の妙門を究めること能わず。自ら徳平等に均しく、心無生に会するに非ずんば、金壚の玉室豈入り易からん哉、と。余、昔経に注録[4]の文疏零失し、今の憶する者は十のうち一つも存せず。因って茲に講じ、以て聊か復之に疏せん。

摂山大師[5]に就いて、唯三論及び摩訶般若のみを講じて涅槃と法華を開かず。諸学士[6]涅槃経を講ぜんことを請う。大師[7]の云く、諸人今般若を解す。那んぞ復儂[8]をして講ぜしむるや。復重ねて請う。乃ち為に本有今無偈を道いて遂に文を講ぜず。興皇[9]に至って以来始めて大いに斯の典を弘む。但し、此の経を開くに、初の形勢一に非ず。或いは開路の義を明す。国家の語に梗礙有り、偏隅未だ賓せざるが如し。彊を開き出づるを祐くるには先に須く斫伐すべし。然る後に方に師を行ずること得。今亦爾り。従来の旧執正道を擁塞するが為の故に、須く破洗して然る後に乃ち経を講ずることを得べし。開路の義、別に科目有り。余暇を待たん。又、或いは舎那、釈迦二仏の教門の差別不同なることを明す。或いは因果人法十隻相対を辨ず。並びに置いて論ぜず。今、此の経の初めに於て且く六段と為す。一は大意、二は宗旨、三は釈名、四は辨体、五は明用、六は料簡なり。

1 現行の曇無讖訳北本大般涅槃経は巻数四十、品数十三である。梁高僧伝巻第二曇無讖伝にもこの三十三巻本について記している。「讖以二涅槃経本品数未レ足還二外国一究尋……（中略）後又遣二使干闐一尋二得後分一。於レ是続訳為二三十三巻一。（大・五〇・二三六b）なお宋本と宮内省本はこれを三十巻としている。

2 南本大般涅槃経巻第六四依品第八「善男子。若有二衆生一於二一恒河沙諸如来所一。発二菩提心一。……（中略）……善男子。若有二衆生一於二二恒河沙諸如来所一。発二菩提心一。……（中略）……。若有二衆生一於二三恒河沙……若有二衆生一於二四恒沙……（中略）為レ他広説十六分中一分之義。」（大・十二・六三九a—b）

3 高僧伝巻第八釈宝亮伝の「勅文」中に「仏性開二其本有之源一。涅槃明二其帰極之宗一。非レ因非レ果。不レ起不レ作。義高二万善一。事絶二百非一。空空不レ能レ測二其真際一。玄玄不レ能レ究二其妙門一。自レ非下徳均二平等一合中無生上金壚玉室豈易レ入哉。」（大・五〇・三八二a）とあるを参照。

4 吉蔵撰大般涅槃経疏二十巻（欠本）のことか。

5 僧朗のこと。摂山棲霞寺に住したことからかくいう。

6 原本に孝とあるも学に改む。大品義疏巻第一に

第一章　経の大意を説く

第一に経の大意を説くとは、此の経の意復何ぞ窮まらん。河西[1]の五門、波藪の七分、興皇の八章、迦葉[2]の三十の解問の如し。如来次第に解釈すれば則ち三十の解意あり。今直ちに其の枢要を挙げて其の綱領を陳べん。然る可し。正道は平等にして本より自ら清浄なり。豈生死の涅槃に異なるもの有らんや。特に衆生の虚妄に由りて文を執し実を求む。名を聞いて仍ち其の真を見ず。或いは云く、涅槃は是れ有なりと。或いは意う、是れ無なりと。或いは言う、二諦の所摂なりと。或いは意う、二諦の外に出づと。或いは意う、生死無常を出づと。或いは意う、涅槃は常住なりと。此の謬りを造るに因りて種種に異計すれば、便ち繫縛を成じ生死有るに致る。前に諸仏菩薩此の妄情を引かんが為に、仮に涅槃を説いて出処の方便と為す。空なるも仮に名を立つ。名、物を得ること無く、物、名に応ずること無し。名物既に爾り、万法安んぞ立せん。所以に生死と涅槃は本二相無し。但此の虚妄を化せんが為なり。虚妄を度するが如く、実に衆生の滅を得て度する者あること無し。此の如く了悟するを涅槃を得と名づく。実に涅槃の得べき無し。但此の迷悟に約して凡と説き聖と説く。仮に生死と名づけ強いて涅槃と称す。凡を改め聖を成じ、生死を捨して涅槃を得せしむ。既に此れを悟れば本来不二にして亦復不一なり。若し凡聖生死涅槃に於て一異の解を作さば、則ち正道を障うるを名づけて語に拠ると為す。今、此の一異等の見を破するを名づけて開道と為す。智に約して開くに、復何の道の開く可き有らん耶。従来の云く、如来の身は凡聖に非ず。是の聖涅槃の法は是れ常にして無常に非ず、と。今此れに対せんが為の故に、如来の身は凡に非ず

「諸学士請レ講二涅槃一」（卍・一・一・三八・一・九・左上）とある等を参照。

7　止観寺僧詮を指す。

8　原本に農とあるも儂に改む。

9　興皇寺法朗（五〇八―五八一）を指す。伝記は続高僧伝巻第七（大・五〇・四七七b―四七八a）

1　以下涅槃経の科文に関する諸説で章安の大般涅槃経疏巻第一（大・三七・四二b）に詳しい。河西道朗と興皇法朗の涅槃経疏は現在欠本であるが、共に章安の疏に引用される。また世親造・元魏達磨菩提訳・大般涅槃経論一巻は現存。（大・二十六・二七七・No. 1527）

2　南本大般涅槃経第三二迦葉菩薩品第二四之一（大・十二・八一一c―八一六a）に述べられる所謂三十の諍論を指す。

聖に非ず、凡聖は悉く是れ如来の善巧なり。涅槃は常無常に非ず、常無常は皆涅槃の方便なり、と明す。何者か共なる耶。常の病重きが故に無常の薬を設け、衆生有を執して涅槃と為すが故に無を設く。身心皆尽くるを乃ち妙極と為す。物情了せずして便ち仏身は無にして涅槃断滅すと謂えり。故に経[3]に云く、其れ復久しからずして王復病を得ば、須く乳薬を服すべし、と。故に今の教は無常に対せんが為の故に常住を設くれば、則ち左右病を除き迭代執を破するなり。執病若し尽くれば薬に在りても皆除く。涅槃の法竟に何の所有あらん。無所有なりと雖も有ならざる所無し。有ならざる所無しと雖も而も所有無し。有無既に爾り、常無常も亦然なり。常に非ず、無常に非ず、常無常具足するなり。

大師[4]此れに於て四雙八隻の義を明す。一は凡聖、二は常無常、三は隠顕、四は半満なり。

(一)凡聖と言うは、涅槃は実には凡聖を開かず。但、大涅槃に住して能く大義を建つるなり。或る時は凡と為り、或る時は聖と化す。故に仏初めて世間に出づるに凡夫の事に同うす。凡に同じと雖も解を異にす。凡の初生なれば則ち諸方に行くこと七歩にして云く、天上天下唯我為尊、と。[5]又云く、我が生胎分尽す。是れ最末後身にして既に自ら解脱を得て復衆生を度せん、と。此の言已に是れ聖を障う。但此の言を説き已って更に嬰児と為る。乃至槃[6]馬・拘力等具さに凡事に同うす。此れ則ち凡を以て聖を覆う。今日、教起ってより明らかに久し。已に聖人方便して便ち現じて此の事を為す。則ち是れ聖を以て凡を開く。開覆の義具さに今昔に通ず。昔は凡を開き聖を覆う。今は聖を開き凡を覆う。昔[7]は覆名、今は開称なり。爾る所以は、初めは縁未だ堪えざるが為に是れ聖なりと

3 南本大般涅槃経巻第二哀歎品第三「其後不レ久王復得レ病。即命二是医一我今病困当二云何治一。医占二王病一。応レ用二乳薬一。尋白レ王言。如二王所レ患応二当服レ乳。我於二先時一所レ断二乳薬一非二実語一。今若服者最能除レ病。」(大・十二・六一八a)

4 興皇寺法朗を指す。

5 釈尊生誕の行歩に関しては、南本大般涅槃経巻第四四相品第七の一に「善男子。此閻浮提林微尼園。示下現従二母摩耶一而生上。生已即能東行七歩。唱二如レ是言一。我於二人天阿修羅中一最尊最上。…(中略)…西行七歩示下現生盡永断二老死一。是最後身上。北行七歩示三現已度二諸有生死一。(後略)」(大・十二・六二八c)のようにあるが、本文の引用は涅槃経ではない。後秦仏陀耶舎等訳長阿含経第一大本経(大・一・四c)等の取意であろう。

6 槃は楽しむこと。拘は角をつかんで獣をおさえることの意。幼時の遊戯を指す。

7 原本は但とあるも昔の誤りであろう。

説くことを得ず、但是れ凡なりと説くことを得、則ち凡、聖を覆うなり。今始めて説いて我は本より是れ聖人なりと道うことを得。聖を以て凡を開くなり。故に前は覆、今は開と道うなり。人此の開覆を聞いて便ち二解を作す。昔の覆を聞いて謂えらく、別に一聖有りて凡の為に覆せらると言い、今の開を聞いて則ち却って凡を除いて別に聖有りて出づと謂う。今明さく、爾らず。昔本より来た是れ聖なり。縁未だ堪えざるが為に説いて聖と為すことを得ず。唯説いて凡と為すことを得、聖道を隠して説くことを得ず。之を名づけて覆と為す。豈別に一聖の覆すべき有らんや。今は只、昔の凡は則ち是れ聖なりと道う。之を詔づけて開と為す。豈別に凡の除く可き、聖の開く可き有らん耶。故に経[8]に云く、如来の方便密教を顕発す、と。故に昔隠して説かざるを密と為し、今日顕説するを密を開くと為すなり。

(二) 凡聖既に然り常無常も亦爾なり。昔無常を説いて常を隠すを覆と為し、今日常を顕説するを開と為す。然も昔無常を説くは只常を説いて無常と為し、無常常を覆うと詔づく。今日只向きの無常は常なりと説くを名づけて開と為すなり。又、但昔日は覆と名づくるを今復開と名づく。何んとなれば、昔無常を説くは無常の為ならず。昔無常を説くは今日の常を開かんが為なり。若し無ならば、昔の無常何ぞ同じく今日の常を顕わさん。是れ則ち昔の無常を今の常と為す。化方便の故に昔の無常今是れ開くことを得るなり。此れは是れ片(わずか)に明すに到るのみにして、未だ是れ好く開くにあらず。下の文に至って常・無常を明すは、常に非ず無常に非ざることを顕わさんが為なり。常の無常、無常の常具足すれば乃ち是れ密を開くなり。此の如く、凡聖の常無常に無常を開く。常の無常、無常の常具足すれば乃ち是れ密を開くなり。此の如き凡聖・常無常の開覆

8 南本大般涅槃経巻第一序品第一「顕二発如来方便密教一」（大・十二・六〇五b）

は並びに是れ大涅槃の方便なり。如しくは用に若しくは真に、凡、聖を覆い、聖、凡を開くと明かすなり。

常無常の開覆は未だ奇と為すに足らず。亦妙用に非ず。只畢竟無と為す。此の如き凡聖、常無常にして而も能く中に在りて凡と為り聖と為り、能く常たり能く無常たる開覆等の事は、乃ち是れ不可思議方便の妙用なり。然も此れに三道の開覆有る可し。一は凡を以て聖を覆い、聖を以て凡を開く。二は凡聖は是れ実にして、涅槃の凡聖の方便を覆う。今は凡聖無にして並びに是れ涅槃の妙用なることを明かす。之を名づけて開と為す。三は凡聖は凡聖の方便に非ざることを覆う。今始めて涅槃は聖に非ず凡に非ざることを顕わすことを得ば凡聖具足す。之を名づけて開と為す。

凡聖既に爾り。常無常も亦然なり。但し、凡聖中に復、凡始と凡終、聖始と聖終、凡終と聖始、聖[9]終と凡始と有り。何んとなれば、昔王宮に託して生ずるを凡始と為し、道場樹下に成道するを凡終と為す。成仏を聖始と為し、雙林に入滅するを聖終と為す。只聖始は則ち凡終にして凡終は則ち聖始なり。凡終を開いて聖始と為す、聖始は則ち凡終なれば、聖終を凡始と為し、凡始は則ち聖終なることを得べきや不や。解して云く、若し通じて実凡実聖に就かば則ち例す可し。何んとなれば、只一たび有得の断常の心起り、無得の正観便ち断ずれば、則ち凡始は聖終と為る。若し無得の正観観ぜず、有得の虚妄便ち起れば、則ち聖終は凡始と為るなり。但此の中、如来の一期の凡聖方便は、只凡終を聖始と為し、聖始を凡終と為すことを得るのみにして、聖終を凡始と為し、凡始を聖終と為すことを得ざるなり。若し進んで論ぜば、此の間の感息み、他方に現生すれば則ち此の土の聖終は他国の凡始なり。

9 原本には聖始凡終とあるも文脈から推して聖終凡始であろう。

問う。凡に始終有り。聖も亦始終あれば、無常に始終有り、常も亦始終有りや不や。常無常相対す、無常に始終有れば常に始終無し。亦応に凡聖相対すべし。凡に始終有らば聖に始終無からん、と。解して云く。小乗は凡聖皆是れ無常なりと明すが故に皆始終有り。大乗は凡聖に二種有り。一は方便、則ち凡聖皆無常なり。二は実義、則ち此の凡聖無ければ始終無きなり。

問者、無常常を覆うを説いて覆と為すは邪常の正常を覆う耶。若し昔の無常は但邪常を覆いて正常を覆うにあらざれば、昔是れ凡なりと説くは但邪聖を覆いて今の正聖を覆わず、昔正しく今日の聖を覆わば亦昔の無常は正しく今の常を覆わん、と。又難ず、若し昔の無常今の常を覆いて邪常を覆わざれば、昔の無常は今の常を除いて邪常を除かず。昔は宜しく禁乳なれば則ち昔は通じて常を除く。又、若し無常今の常を覆わば、未だ今の常を説かざるに云何が今の常を覆わん。前に説く無常は常なる可くんば無常を覆わん。昔無常にして未だ今の常有らざれば、何ぞ昔の無常今を覆うと言うことを得ん耶、と。此れを解すること已に上の如し。諸仏は本より是れ常なり。昔隠して常と説くことを得ず、但無常と説くが故に無常常を覆うと言うなり。

(三) 然も此の開覆は則ち是れ如来蔵の義なり。何が故に如来蔵と名づくるや。衆生如来を蔵するを如来蔵と名づくべしと為すや、如来自ら蔵するを如来蔵と名づくべしと為すや。然り、此の問[10]則ち是れ解し竟れば然れば此の二義を具す。一は衆生性顚倒して如来性を隠覆するが故に如来蔵と名づく。二には衆生如来の性を聞くに堪えざれば隠して説かざるを亦如来蔵と名づく。今は教えて一切衆生に皆仏性有ることを顕わす。仏性とは是れ我の義なり。衆生は方等の大教に依りて、度に臨んで顚倒を断除すれば則ち如来蔵を顕わす。蔵顕われば

10 原本及び続蔵本にも間とあるも竜大写本により問に改む。

則ち法身と名づく。衆生に仏性有りと顕わせば則ち衆生は是れ仏性の根本なることを顕わす。衆生は是れ仏なるが故に仏性有り。仏に非ざれば則ち仏性有ることを得ず。人の姓の張郎の如し。則ち張の姓有り。張に非ざれば則ち張の姓有ることを得ず。仏性亦爾り。故に論に云[11]く。衆生身内に仏有るは密に非ず。身外に有るも亦密に非ず。四並びに密に非ず。衆生則ち是れ仏なるを密と為す。有るが時に此の義を難ず。何が故に仏性有るは密に非ず、則ち是れ仏を密と為す耶、と。有るが解して云く、有の義は則ち疎、是の義は則ち密なり、と。釈難す、衆生は即ち是れ仏なるを密と為し、性有るは密ならずとは、衆生は則ち仏性の義は深く、衆生に仏性有りというは深ならざるなり。経[12]には衆生に仏性有るは甚深なりと云う。既に性有るを深と為す。何の意にて仏性有るは密に非ざるや。好解を見ざるなり。[13]

問う。地論にも亦隠顕の義あり。今と何ぞ解を異にする耶。云く、語同じと雖も其の意は大いに異なれり。彼[14]に如来蔵の体有り。妄の為に覆せらる、之を名づけて隠と為す。復則ち此の体を現出す、之を名づけて顕と為す。貪女の宝蔵、暗宮の瓶瓮の如し。則ち此の譬を用って義と為す。今は則ち爾らず。此の譬は始有を破さんが為の故に本有を言う。豈斯れを守って定まれりと為す可けんや。今明さく、只迷うが故に隠と名づけ、蔵と名づくるのみなり。豈尚別に此の体の隠る可き有らんや。只悟るが故に顕と名づけ、法身と名づくるのみなり。体として顕わす可き無し。迷うが故に隠と名づくれば隠に所隠なし。悟るが故に顕と名づくれば顕に所顕無し。只因縁に迷うが故に隠なり。因縁を悟るが故に顕と名づく。箜篌[15]の無に喩うるが如し。棍[16]等の因縁無ければ声無きを隠と為す。別の声の隠れて内に在る可き無し。若し因縁具足すれば声は則便ち出

11 婆藪槃豆作達磨菩提訳涅槃論「願仏開二微密一広為二衆生一説。云何微密。身外有レ仏亦不レ密。身内有レ仏亦非レ密。非有非無亦非レ密。衆生是仏故微密。云何衆生是仏。衆生非レ有非レ無非二非有一非二非無一。是故衆生是仏。」（大・二六・二七七c―二七八a）

12 南本大般涅槃経巻第十九光明遍照高貴徳王菩薩品第二十之一に「能知二如来深密義一者。所謂即是大般涅槃。一切衆生悉有二仏性一。懺二重禁一。除二謗法心一。尽二五逆罪一。滅二一闡提一。然後得レ成二阿耨多羅三藐三菩提一是名二甚深之義一。」（大・十二・七三一b）とある取意。

13 原本には以下割註有。

14 慧遠大般涅槃経義記巻第三「彼如来蔵為妄所覆。所覆之蔵与後顕時法身為本…（後略）…」（大・四四・六九〇c）「如来蔵者仏性異名論其体也。…（中略）…又為無量煩悩所蔵亦名為蔵。如来法身蘊此蔵中名如来蔵。又此蔵中出生如来。是故亦名為如来蔵。…（中略）…初中貧女喩諸凡夫。無徳称貧。能生真解故名為女。…（後略）…」（大・四四・六九二c）等とあるの取意。

15 箜篌（クゴウ）と書く。一種の楽器。くだらごと。体が長く曲り、二十三弦を懐中に抱き両手で奏する。

16 棒状の器具。

づ。別の声の顕わる可き無し。如来蔵の隠顕も亦爾なり。因縁を了せざるが故に隠顕す。又、此の如き隠顕は並びに縁より出づ。縁未だ堪えず、此の如く説くが故に隠と為す。今皆之を聞くが故に隠れず、乃ち縁より出づ。法身に更に何の隠顕あらんや。

（四）四つには次に半満の義なり。他の云く、昔の無常を半と為し、今の常を満と為す。此れに種種の計有りて不同なり。或いは云く、般若已上法華已来是れ無常の半教なり、唯涅槃のみ常住なれば乃ち満字と為す、と。難じて云く。[17] 又、彼は常無常を明して云く、断明の義は生死の無常は常に通ぜず、涅槃の常は無常に通ぜず。乃至金剛心の無常は常に通ぜず、仏果の常は無常に通ぜず。此の如く一握は無常なり、一握は常なり。無常の一握は既に半、常も是れ一握なれば亦半なり。今の一家は有る時は此れに対して生死の無常を牽いて仏果の常に至り、仏果の常を牽いて生死の無常に至る。彼の両処をして互いに通ぜしめば、無常の辺も亦満、常の辺も亦満なり。一家の云く、半辺の満と満辺の半とは此れ互語に非ず。半の三斗と三斗の半[18]は、亦山が南に在ると山の南に在るとの如く、豈一と為す可けんや。今の満半と半満とに亦異義有り。但此れ有為の意なり。一は満半は円偏の語にして半満は積足の語なり。満半は円偏の語とは、涅槃は本来具足の縁を明す。未だ巧みに円旨を見聞せざるが故に無常の一辺を説くを名づけて半字と為す。故に経[19]に問う、云何満字と及び半字の義とを解するや、と。亦道うことを得、云何半字と及び満字の義とを解するや、と。但今は意を得て、涅槃は具足円満するを縁と為すを半と説くと明すが故に満半と言うなり。半満は是れ積足とは、無常は是れ半、常足りて満と為る。常亦爾り。故に定んで知んぬ。半満は大師の戯言のみ。又、満半は是れ円偏の語と

17 云云。
18 原本には米とあるも半の誤りであろう。
19 南本大般涅槃経巻第三長寿品第四「云何解下満字及与二半字一義上」（大・十二・六一九c）

は、前の半満の如く是れ対治の語なり。何んとなれば、汝が言う常は是れ満とは此れは半辺の満のみ。有るが時に常無常を明すを半辺の満と名づけ、常無常雙用するを満辺の半と名づく。但一家の半満を釈するに復展転して義を明す有り。一は無常を半と為し常を半と為す。無常を半と為し常を満と為す。二は常無常は皆半にして、是の常無常の所病皆洗除し尽す、之を名づけて満と為す。三は常無常は用の半なり、常に非ず無常に非ざるは体の満なり。体用異するが故に。此の体の用、用の体具足するを始めて満と為す。無常を半と為し常を満と為すは二辺の高下を別す。若し、常に非ず、無常に非ず、常無常具足するは二辺の双遊を別するなり。大師[20]無常を明すに復四種有り。一は病[21]薬、二は開覆、三は半満、四は二辺なり。此の四句の無常云何別ならずや。解して云く、病薬の無常とは、無常を以て常を治するに、常の病既に去れば無常の薬も亦除く。三[22]修の如し。常去ると雖も猶無常を存するが故に尤疾を成ず。所以に文に云く、王今病重きが故に、と。此れ一向に須く写(のぞ)くべきなり。開覆の無常とは前の如し。無常を以て常を覆う。復是れ無常と道うも常なれば、無常を除かざるなり。半満の無常とは、昔無常を説くを半と為し、今還た無常を明すを満と為す。又、昔無常を説くこと不了なるが故に半と為す。今無常を明すこと顕了にして、生死は無常、仏果は常住の義具足するを満と為す。二辺の無常とは、此の二は恒に俱なり。豈無常を除いて常を明すことを得んや。但、二辺に前後有り、尤に高下有り。充竝充等の義なり。

第二章　経の宗旨を明す

第二に経の宗旨を明す。古来宗体の異を明すに、常住を以て宗と為し文言を

20　興皇寺法朗。

21　灌頂大般涅槃経疏巻第三に「興皇解云。常無常者薬病相治。無常治レ常。若識二無常是治レ常方便一病去薬尽。若不レ識執レ薬為レ病。病即断見故云二王今病重一。(後略)」(大・三八・五六c)とあるを参照。

22　大乗玄論巻第三涅槃義に「問経明二三修八倒一。何等是三修比丘耶。答三修者。一常無常。二苦楽。三我無我。常者凝然也。無常者遷流。楽者怡愈。苦者逼悩。我者性実。無我者不自在通称。修者習義也。然此三種相対合辨。名為二三修一」(大・四五・四七c)とあるを参照。三修法については南本大般涅槃経巻第二哀歎品第三(大・十二・六一七a以下)参照。

体と為す。今の一家は只宗は是れ体なりと明す。豈体に異なって別に宗有らんや。大師[1]の云く、今此れを解釈するに玆の国に無き所なり、汝何処に此の義を得るや。云く、関河に禀けて摂嶺[2]に伝う。摂嶺は大乗の正意を得る者なり、と。若し是れ諸師ならば皆推求[3]することを息め、熟ら経論を看ず妄りに候文を引いて円旨を失す。文に仏性[4]とは第一義空に名づく、とあるが如きは便ち種種に解釈して、或いは云く、境に従って名づくと為すと。或いは云く、真諦に即すと。彼の云く、仏性は是れ智なり。第一義空は是れ境なり。但智は境に即するが故に仏性を云いて第一義空と名づく、と。又云く、仏性は是れ俗諦なり。但俗は真に即するが故に仏性を云いて第一義空と名づくるなり、と。今明さく此の語未だ足らず、仏性[5]とは第一義空に名づく、智者は空と及び不空とを見る。此れ始めて一句を成ずる耳。是の故に発初に他と異なる。他は此の経を明すに常を以て宗と為す。今初めて常を辨ずるは乃ち倒に之を写すなり。用未だ是れ正意ならず。常は是れ薬用なり。豈正宗を会開せんや。前薬は前病を治し、後薬は後病を治す。常は是れ薬用なり。常を宗と為さば、無常も是れ薬なれば亦応に無常を以て宗と為すべし。彼の云く、後薬は後病を治せば後薬は後経の宗と為り、前薬は前病を治せば、前薬は前経の宗と為る、と。今明さく、前薬を前経の宗と為せば前経に無量の種有り。豈併せて無常を以て経の前宗と為すことを得んや。既に無常を宗と為す可からず。後経寧んぞ常を以て宗と為すことを得んや。今彼に対するが故に無得を以て宗と為す。汝が常を以て宗と為す文は何れに出づる所ぞ。我今経文に依りて自ら云う、無得[6]とは大涅槃に名づくと。故に無所得は此の経の宗なり。又亦汝の言う涅槃は定んで常ならば無常なることを得ず、斯れ則ち常なるが故に。常は有所得と名づく。有所得は乃

1 興皇寺法朗を指す。
2 原本の領は嶺の誤り。
3 原本は片なるも求の誤りか。
4 南本大般涅槃経巻第二十五師子吼菩薩品第二十三之一「仏性者名二第一義空一。」（大・十二・七六七c）
5 同「智者見下空及与二不空一常与二無常一苦之与レ楽我与中無我上」（大・十二・七六七c）
6 南本大般涅槃経巻第十五梵行品之二「復次善男子。無所得者名二大涅槃一。菩薩摩訶薩安二住如レ是大涅槃中一。不レ見二一切諸法性相一。是故菩薩名二無所得一。」（大・十二・七〇六c）

ち生死と名づく。何んぞ涅槃と謂わん。彼の云く、我れにも亦有得無得の義あり。至忘を無得と為し弥存を有得と為す、と。今責めん、汝が忘[7]は存と為す可からず、存は忘と為す可からず。真は絶して待す可からず、俗は待して絶す可からず。還って有所得を成ず。何ぞ無得と謂うや。又、彼の義の真諦中には楽有ることを得ず、一乗有ることを得ず。我は楽と一乗とは並びに是れ世諦なり。又、汝が証に於ては生死は無常、涅槃は是れ常なりと云う。大衆之を聞いて何事かと怪しむ。故に云く、涅槃は定んで常なる可からず、定んで無常なる可からず。待に非ず、不待に非ず。不可思議なりと。聞者怪しむや。只無所得の故に不可思議なれば無所得を経の宗と為すなり。他の難じて云く、汝が無得を以て経の宗を釈して是と為さば、我も亦常を以て経の宗を釈すも亦是なり、と。解して云く、常無常は経に説くと雖も而も病財無所得の義有れば則ち過の生ずること無し。経[8]に云く、常住にあらずと雖も念念滅に非ずと。此れ已に常無常両つながら除くなり。次に復涅槃は常無常に非ずと明せば常無常倶に洗う。徳王[9]中に説くが如し。何んぞ偏えに常を以て宗と為すことを得んや。無得の義は始終に行無きが故に以て宗と為すなり。問う。有得を生死と名づけ無得を涅槃と名づくれば、則ち有得を無常と名づけ無得を名づけて常と為す。得無得は還って是れ常無常なり。云何常無常を捨して得無得を用いるや。解して云く、若し定んで無得を用いて是と為さば還って有得を成じ、無所得と名づけず。一として所依無きは乃ち無得と名づく。無得は常無常に通ずるなり。何となれば、彼の云く、生死は無常涅槃は常なりと。此の如き常無常は並びに有所得なり。今常を明し無常を明すは因縁仮名字の説なり。無常の有なる可き有ること無く、亦常の得す可き有ること無し。一として住する所無きが故に無所得

7 原本の妄は忘の誤り。

8 南本大般涅槃経巻第三金剛身品第五「雖レ不二常住一非二念滅一」（大・十二・六二三a）

9 同、光明遍照高貴徳王菩薩品第二十二之一「如来涅槃非レ有非レ無。……（中略）……非レ常非二不常一……（後略）」（大・十二・七三〇a）

と名づくるなり。又、他の常無常は智断に義を明す。生死は無常涅槃は常、前心は無常後心は常なるが故に是れ有所得なり。今明さく、諸法は未だ曾て常無常にあらず、或いは常と説き或いは無常と説く。諸法実相は常無常を行ずるなり。然も無所得は但是れ此の経の宗たるのみに非ず、通じて是れ一切大乗の正意なり。

第三章　名を釈す

第三に名を釈す。此の中復三と為す。一は異名を明し、第二に名を翻じ、第三に名を絶す。

(一) 初めに異名を明すとは、或いは泥洹と云い、或いは泥曰と云う。肇師[1]の云く、彼の国と楚夏と同じからず、と。大亮[2]の云く、涅槃は異俗の音なり。音に楚夏有り。涅槃は正しく中天竺の音なり、と。或いは云く、此の三名は三本に目づく。泥曰とは此れは是れ中本なり。泥洹とは是れ六巻経なり。涅槃は則ち此れ大本なり、と。今謂く、未だ必ずしも然らず、大本も大泥洹経と名づくることを得るなり。

(二) 次に名を翻ず。且く摩訶の義を明す。此れは是れ外国の音なり。此れに三義有りと雖も正しく翻じて大と為す。金光明[3]に云く、摩訶提婆を此れには大天と云うと。又今既に大意を標す。何ぞ更に標することを須いんや。但、大に多義有り。此の経に依るに凡そ六義有り。一には常なるが故に大なり。言う所の大とは之を名づけて常と為す。然るに無常の二を大と名づくることを得。而も終に常に及ばず。大薪と大火とは、大薪は火に及ばず。常無常も亦爾なり。二には広きが故に大なり。然る所以は、経[4]に云く、言う所の大とは其の性広博な

1　肇論・涅槃無名論第四「僧肇言。泥曰。泥洹。涅槃。此三名前後異出。蓋是楚夏不同耳。云二涅槃一。音正也」（大・四十五・一五七b）

2　大般涅槃経集解巻第一「僧亮曰。此是如来神道之極号。常楽八味之都名。涅槃是異俗之音。音有楚夏。前後互出。乃有三名。謂泥洹。涅槃。泥曰。言涅槃者中正天竺之音也。名含衆義。此方無一名訳之。存其胡本焉。」（大・三十七・三七七b）なお、僧亮の伝記は高僧伝巻第七（大・五〇・三七二b）

3　金光明経第四「次子名曰二摩訶提婆一」（大・十六・三五四c）

4　南本大般涅槃経巻第五四相品之余「所レ言大者其性広博猶如下有レ人寿命無量名二大丈夫一。（後略）」（大・十二・六三一c）

り。広博なるが故に大なり。三には高きが故に大と名づく。経[5]に云く、譬えば大山の如し。一切の世人の上る能わざる所なるが故に大山と名づく。涅槃も亦爾り。声聞縁覚及び諸菩薩の上る能わざる所なり。是の故に大と名づく。四には深きが故に大なり。経[6]に云く、大とは不可思議に名づく。一切の世人の測る能わざる所なり。是の故に大と名づくるなり。五には多きが故に大と名づく。経[7]に云く、譬えば大城の如し。諸珍宝多きが故に大城と名づく。涅槃も亦爾り。諸法宝多きが故に名づけて大と為す。六には勝なるが故に大と名づく。譬えば人有り。人中に於て勝るが故に大と名づく。涅槃も亦爾り。一切に勝るが故に名づけて大と為す。六の大の名有りと雖も二種を出でず。一は体大、二は用大なり。体大とは則ち是れ法性なり。涅槃は則ち諸仏の法性なり。用大とは八自在我の故に用大と名づくるなり。又二大有り。一は待大、二は絶大なり。然れども此れ無二なり。只待は則ち絶なり。因縁則ち空なるが故なり。

次に涅槃の義を明かす。前に摩訶の題既に大を標するに更に異釈なし。涅槃を翻ずれば則ち衆解同じからず。或いは無翻と言い、有翻と言う。今略して無翻の四師有翻の六師を出だす。

無翻の四師とは、第一に大亮師[8]涅槃は無翻なりと明かす。彼の云く、涅槃は是れ如来神通の極号、常楽八味の都名なり。涅槃は是れ異俗の名なり。名に楚夏有り。前後互いに出づるに乃ち三名有り。涅槃は正しく是れ中天竺の音にして名に衆義を含む。此の方には一名を以て之を釈する無し。其の胡本を存するのみなり、と。此れ遠く河西乃至大済[9]を述ぶるなり。皆此の説に同じ。第二に瑤師[10]亦無翻と云う。彼の師の序に云く、称は衆理を包み、名は衆義を冠す。一名の中に無量の名有り。処音に以て其の称を訳するもの無く、晋言に以て其の号

5 南本大般涅槃経巻第二十一光明遍照高貴徳王菩薩品之三「善男子。若摩訶那伽及鉢犍陀大力士等経二歴多時一所レ不レ能レ上乃名二大山一。声聞縁覚及諸菩薩摩訶那伽大力士等所レ不レ能レ見。如レ是乃名二大涅槃一也。」(大・十二・七四六b)

6 同「善男子。大名二不可思議一。若不可思議一切衆生所レ不レ能レ信。是則名為二大般涅槃一。」(大・十二・七四六b)

7 同「復次善男子。譬如下宝蔵多二諸珍異一百種具足故名中大蔵上。諸仏如来甚深奥蔵亦復如レ是。多二諸奇異一具足無レ欠。名二大涅槃一。」(大・十二・七四七a)なお原文に大城とあるは涅槃経の本文に照して大蔵の誤りであろう。同処には大城の喩もあるが、説明内容を異にする。

8 前出。大般涅槃経集解巻第一(大・三七・三七七b)

9 河西は河西道朗、大済は曇済を指す。曇済の説は大般涅槃経集解巻第一に「夫大涅槃者。蓋是大聖神道之極号。八味之都名。此是垂終之道教。放言異唱。故制名不同。成天竺之音。義有苞含。此方無一言以當之。故推義不一。亦言無生。復云無滅。亦言無為。亦言無相。」(大・三六・三七七c―三七八a)とあるを参照。

10 原本の陸師は瑤師の誤り。大般涅槃経集解巻第一「法瑤云。……(中略)総莫之大。故称苞衆

に代うる者無し。故に翻ず可からず、と。第三に宝亮[11]師も亦不可翻と云う。彼の序に云く、涅槃は是れ出世法の総名にして衆法の通号を貫く。然るに此の語は乃ち方土の音なり。聖既に彼の国に出づ。此れに亦名の以て正しく翻ずるもの無し。但文に訓況[12]指義して釈し已んぬ、と。第四に知秀[13]師亦不可翻と云う。彼の師の序に云く、涅槃は是れ円極至住の総名なり。然も迹に因って名を見、名を見て本を知る。名迹の興るは天竺自り肇む。我が大梁にも亦称有るべし。但、弘道の近くは既に西域を発軫して未だ此の方を測らず。何[14]を以て訳翻せん。是れを以て前賢後哲皆旧本に順じて述べて作らず。故に之を経の首[15]に題す、と。

此の四師は並びに涅槃は不可翻と云う。彼の不可翻を明かすに文有り義あり。義とは涅槃は是れ円徳なり。円徳は円名を立つるが故に一名に翻ずべからず。二には文有りとは、三点涅槃を成ずるが故に一名に翻ずべからず。今五難を作さん。難じて云く、一は大いに非なりと作すに不等の難あり。彼の国には総名有るも此の間に円称無し。如来は但彼の土の衆生を念じて此の方を受けず。今残るに彼に円名有りて義を解す。此れに円名無ければ則ち円義を解せず。故に悲しいかな不なる爾[のみ]。涅槃此の土に来るも便ち無益を成ず。第二に今昔に就いて相決の難あり。今昔皆涅槃なり。皆応に可翻なるべし。然るに今不可翻が是れ涅槃なる可くんば、昔の可翻は昔涅槃に非ざるべし。昔は涅槃を具足せず、今は具足して不可翻なり、昔は具足せざれば則ち可翻なりとせば則ち難ぜん。今の具足是れ涅槃なる可くんば、昔具足せざるは応に涅槃に非ざるべし。第三に摩訶に約して涅槃を難ぜん。涅槃は是れ摩訶の涅槃なり。涅槃既に不可翻ならば、摩訶は是れ涅槃の摩訶なり、摩訶[16]も亦不可翻ならん。又摩訶に三義を含む。摩訶を翻ぜば涅槃も三徳を含む、亦一に解説して涅槃を翻ぜん。

理。名冠衆義。故曰一名之中。有無量名也。是則宗音。無以訳其称。晋言無代其号。故欲以此音而当者。失其旨。」（大・三七・三七七c）なお法瑤の伝記は高僧伝巻第七（大・五〇・三七四b）

11 大般涅槃経集解巻第一「宝亮曰。今涅槃之音。就用而得称。是出世法之総名。貫衆徳之通号。……（中略）……然斯之語。乃是方土之音。聖既出於彼国。此亦無名以正翻。但文中訓況指義釈而已也」（大・三七・三七八c）

12 原文に訓況とあるも集解により訓況に改む。

13 同「智秀曰。斯蓋円極至徳之総名也。……（中略）……然既因迹見名。亦尋名知本。但名迹之興。乃肇自天竺。在我大梁。亦理応有称。而弘道之近。既発彰西域。未測此方。何以訳翻。是以先賢後哲。皆脩旧本。述而無作。故題之経首。」（大・三七・三七九a）

14 原本の伊は集解により何に改む。

15 原本の道は集解により首に改む。

16 原本及び続蔵本には涅槃とあるも竜大写本により摩訶に改む。

若し摩訶は円名に非ず、涅槃は是れ円名なりと言わば、此の摩訶は涅槃の摩訶に非ず、涅槃は摩訶の涅槃に非ず。涅槃は三徳を含めば名既に円なり。摩訶は三義を含めば摩訶も亦是れ円名なり。皆翻ずべからず、皆翻ずべきなり。第四に難ず。涅槃不可翻ならば、涅槃の一部を別し、並びに涅槃を壊するなり。発初晨朝に唱えて般涅槃を告げたまう。一切の大衆皆悉く悲悩す。純陀[17]云く、如来は方便して涅槃したもうと知ると雖も、而も我等は悲悩を懐かざること能わず、と。既に是れ衆徳大衆及び純陀何事か悲苦するや。又、現病品[18]に云く、鶴樹の間に倚臥したもう。下愚の凡夫の見てすら尚必ず涅槃したもうと言う。若し是れ衆徳下愚ならば豈能く見るを得んや。若し見ば衆徳乃ち是れ上智なり。何が故に下愚と名づけん。故に不可なり。第五に総別の難あり。彼は円偏の名あり。彼は総別有り。此は但偏名のみにして円名無し。此は但別のみ有りて総無しといわば、此彼皆総別の名有り。彼此皆円偏の名有るなり。

次に有翻の六師を出さん。翻者無量なれども略して六師を明かす。第一に道生法師[19]は翻じて滅と為す。其の義訓は乃ち自多方正を名づけて滅と為すなり。経論皆爾なり。第二に肇師[20]は之を翻ずるに滅度を以てす。秦には無為と言い亦滅度と言う。虚無寂漠として妙に有為を絶するを以て名づけて無為と曰い、其の大患永く滅し四流を超度するを以ての故に滅度と云う。他家は同じからず。滅は則ち法を語り、度は則ち人に名づく。法は本有今無、人は此れ従り彼に到る、と。又云く、実法の人法は皆滅し仮名の人法は悉く度するなり、と。又滅というは凡聖皆滅するも、度は則ち凡夫に簡異す。凡夫は滅し已って後に生ずれば度と称することを得ず。大聖は一たび滅して永く復生ぜず。故に之を称して度と曰う。第三に太原宗師[21]は解脱と翻ず。彼の云く、涅槃は累尽の通名、万

17 南本大般涅槃経巻第二純陀品第二「爾時純陀復曰レ仏言。如レ是如レ是。誠如二尊敬一。雖レ知二如来方便示現入二於涅槃一。而我不レ能下不レ懐二憂悩一（後略）」（大・十二・六一四c）

18 南本大般涅槃経巻第十現病品第十八「調御天人師倚二雙樹間一下愚凡夫見当レ言二必涅槃一」（大・十二・六七一a）

19 大般涅槃経集解巻第一「道生曰。般泥洹者。正名云滅。取其義訓。自復多方」（大・三七・三七七b）

20 肇論・涅槃無名論第四「開宗第一。無名曰。経称有余涅槃無余涅槃者。秦言無為。亦名滅度。」（大・四五・一五七b～c）

21 大般涅槃経集解巻第一「僧宗曰。此累尽之都名。万善之極称也。……（中略）……涅槃者。天竺正音。此言解脱。謂脱於万累者也。累患既息。体備衆徳。」（大・三七・七七八a）なお僧宗の伝記は高僧伝巻第八（大・五〇・三七九c―三四〇a）

善の号なり。涅槃は是れ天竺の音にして此れには正しく解脱と言う。経に説くが如し、と。乃至開善等は翻じて無累と為す。第四に宣武寵師は翻じて大寂定と為す。経に[22]云く、涅槃を大寂定と名づく、と。第五に仙師は不生と翻ず。梁武は用いるに煩悩に対しては涅槃と名づけず、煩悩の生ぜざるを乃ち涅槃と名づくるなり。第六に影師は安楽と翻ず。不安は則ち生死と名づけ、安楽は是れ涅槃なり、と。北人の云く、般涅槃那は入息と翻ず。入に三種有り。一には実論、謂く妄を息め真に帰す、因従り果に趣くが故に入と名づく。二には真応相対、化を息め真に帰するを入と名づく。三には但応に就いて言を為す。謂く有為を捨して無為に入るを入と名づく、と。

涅槃は正しくは翻じて滅と為す。若し義に随えば不生解脱等と翻ず。問う。若し正しくは滅と翻ぜば、何が故に下文に諸[23]結の火を滅するを滅度と名づけ、覚観を離れるが故に涅槃と名づくと云うや。外国の滅の名同じからず。諸結の火滅するを弥留陀[24]と名づけ、覚観を離れるを涅槃那[25]と名づくるなり。言息み究竟解脱して永に蘇息す。息に三有り。一には因果の患を息め、二には諸の事業を息む。諸の事業とは文[26]に云く、禅定智慧解脱を得と雖も畢竟と名づけず。若し能く三十七品所行の事を断除せば乃ち畢竟涅槃と名づく、と。

前の諸師は定んで不可翻と言う。具さには前難の如し。今復定んで可翻と言う。亦彼をも研覈せん。叡師[27]の大品序に云く。秦言の謬れるは之を定むるに字義を以てし胡音の失せるは之を正すに天竺を以てす、と。不可変ならば則して而も出だす。今既に出だすに涅槃を以てすれば則ち是れ不可翻なり。云何が可翻と言う耶。今更に別に難じて両意を為さん。生肇等の翻じて滅と為すを一難と為し、来宗師等の解脱無果と翻ずるを一難と為す。若し涅槃を翻じて解脱と

22 南本大般涅槃経巻第二十八師子吼菩薩品之四「以二是義一故。我於二此間婆羅雙樹一入二大寂定一。大寂定者名二大涅槃一。」（大・十二・七九〇b）

23 同巻第二十九師子吼菩薩品之五「諸結火滅。故名二滅度一。離二覚観一故。故名二涅槃一。」（大・十二・七九四b）

24 SKT. nirodha（滅）の音写語。

25 SKT. nirvāṇa（涅槃）の音写語。

26 南本大般涅槃経巻三十四迦葉菩薩品之四「雖レ得二世楽及出世楽四沙門果及以解脱一。亦不レ得三名為二畢竟一也。若能断二除三十七品所行之事一是名二涅槃一。是故我説二畢竟者即大涅槃一」（大・十二・八三五b）

27 出三蔵記集巻第八摩訶鉢羅若波羅蜜経抄序第一（大・五五・五二b—c）に道安の五失本の説を述ぶ。なお吉蔵大品経義疏第一に「叡師云秦言謬者定レ之以二字訓一彼音失者正レ之以二天竺一也」（卍・一・一・三八・一・九・左下）とある。

為すと言わば、神に栖して累無からん。何事か憂悲せん耶。又云く、諸結[28]の火を滅するを名づけて滅度と為し、覚観を離れるが故に名づけて涅槃と為す、と。既に涅槃と滅度との両つながら出づること別なり。知んぬ、滅度を以て涅槃を翻ぜざることを。然るに生肇等の師は親しく什師に承け、並びに共に翻訳せり。豈謬り有るべけんや。而も釈弾片にする耶。今明さく、生肇を破せず。今古の人の其れ定翻なる者を弾ずる耳。若し定んで滅度と翻ずと言わば則ち過の甚だしきなり。

問う、汝は今云何と。此の問を作すは且く彼に反せん。汝が涅槃と言うは有名とや為ん、無名とや為して、而も翻無翻を問う耶。而も未だ有名無名を知らずして更に翻無翻を問う。如し未だ兎頭の有角無角を知らずして莞角の若為が長短を問わん耶。翻無翻も亦爾なり。無名は是れ本、翻無翻は是れ末なり。

然るに此の義に斉と不斉と有り。定んで其れ斉ならば涅槃は未だ曾て名にあらず、未だ曾て無名にあらず、未だ曾て翻にあらず、未だ曾て無翻にあらず。則ち名に非ず、翻に非ず、無翻に非ず。故に経[29]に云く、大涅槃は得聞すべからず。何を以ての故に。有為に非ざるが故に、無為に非ざるが故に、音声に非ざるが故に、不可説の故に、と。故に知んぬ、名に非ざることを。亦得聞すべし。聞を以ての故に、と。故に知んぬ、無名に非ざることを。所以に涅槃は名に非ず。所以に涅槃は無名に非ず。強いて名と立つるなり。但強いて名と立つるのみに非ず、亦強いて無名と言う。則ち名に非ず、無名に非ざるに名と施し、無名と施す。亦翻に非ず、無翻に非ざるに強いて翻じ、強いて無翻なり。

不斉と言うは、涅槃は名無名に非ざるを強いて涅槃と為して名を立つるを明す。強いて名づくる中に就いて翻不翻を論ずるなり。何んとなれば、涅槃は別

28　前出。註23参照。

29　南本大般涅槃経巻第十九光明遍照高貴徳王菩薩品第二十二之一「善男子。不聞者名二大涅槃一。何故不聞。非二有為一故。非二音声一故。不可説故。」（大・十二・七三五a）

の総なるが故に翻にして無翻なり。涅槃は総の別なるが故に無翻にして翻なり。不翻にして翻なれば亦名づけて滅度と為し、亦無累解脱等と名づくるなり。翻にして不翻なれば則ち三徳円満し、所として含まざる無し。豈一義を以て翻ず可けん耶。故に涅槃は総別の義を具するが故に具さに翻と不翻と有り。

又、今昔に就いて総別を論ずるに四句の義有り。自ら総は是、別は非なる有り。合して三徳涅槃と曰う。自ら別は是にして総は非なる有り。昔日の涅槃の如し。唯是れ断無を涅槃と為すなり。総別俱に是なりとは、昔は別是、今は総是なり。俱に非なりとは昔は総非今は別非なり。次に今昔[30]の涅槃を明かして自ら総別是非の四句義を論ず。何者か其の相と為すや。一往因縁に就いて論を為せば、総は是、別は非なりと明す。是れ是非なり。総と言えば則ち別なることを得。是と道えば則ち非なることを得。若し総と言いて別なることを得ざれば則ち別は総の別に非ず。是と道いて非なることを得ざれば此の非は是の非に非ず。今の総は是れ別の総なり。総は是れ別なれば即ち是なり。今の別は是れ総の別なり。別は総に非ざれば即ち非なり。若し論ずるに意を以てせば、此の言已に是にして人心得することあるも悟と云うこと能わず。鄭考[31]の徒は好んで字に依る。今復須く其の文処を示すべし。総は是、別は非なりとは、哀歎品の三徳縦横[32]の如し。皆三徳円かなるには非ず、と。其れ乃ち是なり。別は是、総は非なりとは、下文の如し。仏を覚と名づけ、涅槃を解脱と名づく。又涅槃を果と名づく。果は断を取りて智を取らざるなり。次に総別定まり無く一切は皆総、皆別なり。若しくは当に涅槃は総、三徳は別なるべし。一切は皆是れ般若、皆是れ解脱なり。涅槃に秘蔵を成ずる有りと、四相品に説[33]くが如きは涅槃を別と為すなり。大品[34]に一切の善法を摂して般若に入ると云うは是れ般若を総と為

30 原本は欠字なるも文脈より推して昔の字を補う。

31 孝→考

32 南本大般涅槃経巻第二哀歎品第三「何等名為二秘密之蔵一。猶如二伊字三点一。若並則不レ成レ伊縦亦不レ成。如二摩醯首羅面上三目一。乃得レ成レ伊。三点若別亦不レ得レ成。我亦如レ是。解脱之法亦非二涅槃一。如来之身亦非二涅槃一。摩訶般若亦非二涅槃一。三法各異亦非二涅槃一。我今安二住如レ是三法一為二衆生一故名レ入二涅槃一如二世伊字一。」（大・十二・六一六b）

33 同巻第四四相品第七之一「声聞縁覚不レ解二如レ是甚深之義一。不レ聞下伊字三点而成二解脱・涅槃・摩訶般若一成中秘密蔵上。」（大・十二・六二七b）

34 摩訶般若波羅蜜経巻第二往生品第四「舎利弗。若有実語能摂一切善法者。般若波羅蜜是。」（大・八・二二八a）

すなり。然るに今涅槃の総別に因って則ち涅槃の別総を議す。必ず此の二義を具す。若し偏えに一義を取れば則ち未だ涅槃の通意を識らざるなり。

(三) 第三に絶名を明す。古来真諦と涅槃との絶と不絶とを明かすに凡そ三説の不同あり。一に云く、二は皆絶せず、と。真諦に真如実際の名有り涅槃に常楽我浄の称有り。而も絶と言うは乃ち生死世俗患累の名を絶するなり。若し美妙の名を見れば則ち絶せず。第二に皆絶なりと明す。真如は本より自ら寂絶布微にして名の及ぶ所に非ず。涅槃も亦爾り。言語の道断じ心行の処滅するなり。第三師の云く、真諦は絶、涅槃は不絶なり、と。是は俗諦の有なれば則ち真の義は尚論ぜん。涅槃は終に是れ俗諦、是れ二仮に続待す、と。荘厳は涅槃は二諦の摂なりと明す。開善は是れ俗諦の摂なりと明す。故に不絶なり。

今次第に之を難ぜん。第一家を難ず。真諦と涅槃と皆不絶ならば則ち経文に違す。[35] 経[36]に云く、涅槃は名に非ざるを強いて之を名と為す、と。又[37]云く、名に非ず、相に非ず、待に非ず、不待に非ず、と。云何不絶と言う耶。若し涅槃に生死の名無きを絶と為すと言わば、亦生死に涅槃の名無かるべし、生死も亦絶なり。若し互いに無を互いに絶と為さば、亦互いに無なるべきは互いに妙なるべし。互いに妙なる可からざらん耶。互いに絶ならん耶。又、肇師は涅槃論[38]に依って涅槃の無名を明す。云何涅槃不絶ならんや。斯くて則ち関河の旧説に乖き、復涅槃の正文に違するなり。

第二解を難ず。涅槃は言語を断じ、心行を絶し、無名無相なり。所以に是れ絶なりと明せば亦然らず。若し涅槃の絶は真諦の絶に同じならば、亦涅槃は真諦の頑に同じかるべし。涅槃は真諦の頑に同じかるべからざれば、則ち涅槃は真諦の絶に同じかるべからず。

35 原本は□。

36 南本大般涅槃経者第二十一「如二抵羅婆夷一名為二食油一。実不レ食レ油。強為立レ名。名為二食油一。是名無因強立二名字一。善男子。是大涅槃亦復如レ是。無レ有二因縁一。強為立レ名」(大・十二・七四七b)

37 同巻第十九「如来涅槃非レ有非レ無。非二有為一非二無為一。……(中略)非レ名非二不名一。非レ相非二不相一……(中略)非レ待非二不待一」(大・十二・七三〇a)

38 前出。肇論涅槃無名論第四(大・四五・一五七a―一六一b)

第三師云く、真諦は絶、涅槃は不絶とは亦然らず。若し真諦は絶、涅槃は不絶ならば、真諦は妙、涅槃は不妙、真諦は空、涅槃は不空ならん。二種皆空なれば二は皆絶なり。彼の云く、真諦は妙無、涅槃の妙に二種有り、と。有無異なりと雖も而も是れ妙なり。既に皆妙なれば則ち皆絶なるべし。一は絶、一は不絶なれば則ち一は妙、一は不妙ならん。

問う。今の意は云何んぞ耶。解して云く、若し更に解有らば還って同じく載を足す耳。只前来の諸解を除くに注意せば自ら現われん。何ぞ煩わしく別説せん耶。而も今の鄣学者為るや未だ道の無を体すること能わず。今指に因って月を識らしめ教を藉りて理を知らしめん。而も心をして存する所無からしめん。又云く、文字を離れること無くして解脱の相を説かん、と。又経[39]に云く、乃ち解脱の無言を知るも未だ言は則ち解脱なりと知らず、と。二に云く、乃ち涅槃の無名を知るも未だ名は則ち涅槃なりと知らず、と。又此の経[40]の下文に云く、如来の涅槃は有為に非ず、無為に非ず、名不名に非ず、待不待に非ず、と。則ち是れ絶に非ず不絶に非ず。何ぞ得て絶不絶ならん耶。又涅槃の体は有是も是ならず、有非も非ならず、是是も是なること能わず、非是も亦是ならず、非非も非なること能わず、是非も亦非ならず。故に是に非ず、非に非ず、能是能非なり。絶に非ず、不絶に非ず、能絶能不絶なり。有人言く、三論の釈する所は但真諦の一支義を得るのみなり。我の真諦は四句を離れ百非を絶す、と。今明さく、爾らず。経[41]に既に云く、物に非ず不物に非ず、と。則ち真に非ず不真に非ず、俗に非ず不俗に非ざるなり。何ぞ真諦に関わらん。問う。涅槃は既に名に非ず不名に非ず、是れ何物か能く名たり能く無名なる耶。解して云く、涅槃は物に非ず不物に非ざれば相得す。更に問わん。道は何物なる耶。無物にして

39 維摩詰所説経観衆生品第七「天曰。如何者旧大智而黙。答曰。解脱者無レ所二言説一。故吾於レ是不レ知レ所レ云。天曰。言説文字皆解脱相。所以者何。解脱者不レ内不レ外不レ在二両間一。文字亦不レ内不レ外不レ在二両間一。是故舎利弗。無下離二文字一説中解脱上也。所以者何。一切諸法是解脱相。」（大・十四・五四八a）の取意。

40 前出。注37参照。

41 南本大般涅槃経巻第十九光明遍照高貴徳王菩薩品第二十二之一「如来涅槃非レ有非レ無……（中略）……非レ物非二不物一……（後略）。」（大・十二・七三〇a）

物、（物にして無）[42]物が所謂正道なり。故に肇師[43]の云く、涅槃とは名づけて道と為すなり、と。涅槃は名無きを強いて為に名を立つるを涅槃と為すなり。但下文に名を明すに二種有り。一は因縁名、二は無因縁名なり。因縁名とは舎利弗の如し。無因縁名[44]とは抵羅婆夷の如し。実には油を食わざるに強いて食油と名づく。涅槃も亦爾り。因縁有ること無きに強いて涅槃と名づくるなり。問う、強いて涅槃と為せば直ちに名づけて生死に対すと為すや、生死に対せざるや。解して云く、涅槃は豈生死に対せざらんや。故に肇師[45]の云く、出処に号を異にし応物の仮名なり、と。難じて云く、若し爾らば則ち是れ因縁名なり。何んぞ無因縁と謂わん、と。解して云く、涅槃は未だ曾て名と無名とにあらず、未だ曾て対不対にあらず、道因縁も亦是強いて因縁と言う。一切は強いて名を立つるなり。

次に五類一況を挙げて涅槃を釈せん。五類とは一に法界、二に法性、三に法身、四に般若、五に仏性なり。一況とは即ち是れ虚空なり。虚空に教の不絶の義と及び総別の義を具す。法界と言うは界は非[46]なるが故に則ち絶せず。名無名の義を絶するを而も法界と名づくれば則ち絶の不絶の義、無名の名の義なり。法性とは正法性は一切の語言の道、一切の趣と非趣とを遠離して悉く寂滅の相なり。即ち不絶の絶の義、名の無名なるを名づけて法性と為せば則ち絶の不絶、無名の名の義なり。法身とは金剛身品[47]の如し。般若とは般若を歎ずる偈の如し。念相観じ已って除き語言亦滅するなり、と。仏性とは師子吼[48]の如し。仏性とは第一義空なりと明す。言う所の空とは空と不空とを見ざるなり、と。虚空の況を挙ぐるは六種品[49]に云うが如し。是の故に知んぬ。虚空は有に非ず、亦無に非ず、相に非ず、可相に非ず、と。

42 （ ）内の文字原本に欠く。
43 肇論・涅槃無名論第四「而曰。有余無余者。良是出処之異号。応物之仮名耳。余嘗試言之。夫涅槃之為道也。寂寥不可以形名。微妙無相。不可以有心知。」（大・四五・一五七c）
44 前出。（大・十二・七四七b）
45 前出。（大・四五・一五七c）
46 原本の非の下に脱字あらん。
47 南本大般涅槃経巻第三金剛身品第五「善男子。如来身者是常住身。不可壊身金剛之身。非二雑食身一。即是法身。」（大・十二・六二二c）
48 前出。（大・十二・七六七c）
49 中論巻第一観六種品第五「是故知虚空非レ有亦非レ無非レ相非二可相一余五同二虚空一」（大・三十・七c）

次に人法の義を明す。問う。涅槃は是れ人の名なるや、是れ法の称なるや。具足の名とや為ん、不具の名とや為ん。他の云く、涅槃は是れ法の名なり。既に称して涅槃と云う。涅槃は是れ至極の名にして原を窮め性を尽くすの説なり。所以に是れ具足なり、と。今明さく、涅槃は有為に非ず無為に非ざれば、即ち具足に非ず不具足に非ず。人に非ず法に非ざるなり。亦は具足し亦は人の名亦は法なり。何んとなれば、三点の員伊金剛宝瓶満足して欠くること無きが故に具足す。而も涅槃は是れ果なり。果は断徳なるが故に不具足なり。涅槃は是れ法にして解言すべからず。人とは四徳を涅槃と為す。我とは則ち是れ人なり。又、涅槃は但に法なるのみに非ず、亦是れ譬なることを得。云く、[50]如実には有に非ず無に非ず。王の罪も亦爾なり、と。又、中論[51]に云く、無生亦無滅、寂滅なること涅槃の如し、と。旧に云く、仏方広華厳に人法涅槃を具足す、と。但、是れ法のみにして人に非ざれば法長人短の義を明すこと無し。釈迦の穢土に出づるは、我人の病を破せんが為なりと明すが故に法長人短の義を明す。舎那は浄土界に出づれば人法倶に長なり。然るに釈迦の人法に具さに四句あり。一に法長人短、二に人長法短、三に倶に短、四に倶に長なり。釈迦は我人の病を破せんが為の故に人我無くして法有りと明す。故に無造という。無受とは善悪の累を忌まざるなり。又、法は生死涅槃に通ずるが故に、法長人短とは生死に人無く、唯涅槃にのみ人有り。生死に我無く、唯涅槃にのみ我有るなり。此れは則ち具さに衆生の断常の二見を破す。生死に人無きが故に常ならず、而も法有るが故に衆生を断ぜず。若し生死中に人有りと聞かば則ち常見を起す。常見を破するが故に生死には一向に人無きことを明す。衆生若し法無しと聞かば則ち因果罪福等無しと言わん。則ち断見を起す。此の見を破さんが為の故に法

50　南本大般涅槃経巻第十八梵行品之第五「大王。世間之人是愛僮僕。不レ得二自在一。為二愛所一レ使而行二殺害一。設有二果報一乃是愛罪。王不二自在一当レ有二何咎一。大王譬如二涅槃非レ有非レ無而亦是有一。」（大・十二・七二七b）の取意。

51　中論巻第三観法品第十八「諸法実相者　心行言語断無レ生亦無レ滅　寂滅如二涅槃一」（大・三〇・二四a）

有りと云う。人有ること無しと雖も善悪の法失せず、故に人短法長を明すなり。法短人長とは、此は少しく見難し。且く一往三の我人を明さん。同じく結惑を断じ、同じく灰断に入るも、未だ法の終極有るを辨ぜず。今曰く、涅槃と及び前の人法とは人寿と等しく太虚に同じきことを明す。正法は終竟に滅尽するが故に法は短なり。俱に長とは、生死に既に虚妄の人有り。亦虚妄の人法有り。皆長なり。又、仏は常なり法も常なり、比丘僧も常なるが故に長なり。此の如き長短は不長不短を顕わさんが為なり。

第四章　涅槃の体を明す

第四に涅槃の体を明す。前に経宗を明して通じて一経の宗を明せり。今は体を明さん。涅槃は一法体なり。既に四と為す。初め一法に就いて体を明し、次に二法に体を明し、三に三法に体を明し、四に四法に就いて体を明さん。

(一)　一法に体を明すと言うは、人法是れ有なりと言うが故に下に云く、涅槃を名づけて善有と為す、と。旧には妙有と云うなり。有るが復二義を為す。一は本有、二には始有の義なり。本と始は同じからずと雖も並びに是れ常なり。本有は是れ常、始有は此れ常なり、と。今此の義を難ぜん。若し涅槃に本有り始有れば、亦有曾有今なるべし。若し曾て有り今有れば則ち三世を成ず。三世に常無し。常法は無曾無今なれば常法に本如[1]無からん。既に本有り始有れば、応に曾今便ち三世無常を成ずること有るべし。

(二)　次に二法に体を明すとは則ち是れ二諦の義なり。荘厳[2]の云く、涅槃は二諦の外に出づ、と。明さく、惑因の所感の果は是れ浮虚の故に是れ世諦なり。仮体は則ち空なるが故に是れ真諦なり。今、仏果は惑因の所感に非ざるが故に世

1　如は始の誤りか。
2　荘厳は荘厳寺僧旻（四六七―五二七）伝記は続高僧伝巻第五（大・五〇・四六一c）
3　仁王般若波羅蜜経巻上「尽二相無相一為二薩婆若一超二度世諦第一義諦之外一」（大・八・八二六c）
4　開善は開善寺智蔵（四五八―五二二）伝記は続高僧伝巻第五（大・五〇・四六五c）

諦に非ず。世諦に非ざるが故に則ち空ず可からず。故に真諦に非ず。所以に仁王経[3]に云く、薩雲若し覚せば世諦・第一義を超度するなり、と。開善[4]の解して云く、果涅槃に二諦を具足す。涅槃は是れ二仮に続待するが故に是れ世諦なり。但則ち真なるのみに非ず、亦復真に冥ずるが故に是れ二諦なり、と。第三に治域師云く、仏果は世諦に非ざれば則ち是れ真諦なり。真諦は是れ諸法の本なりと明す。但、衆生は顚倒起惑して生死を構造し、遂に世諦を成ず。今還って道を修し、惑を断ずれば生死尽く、世諦則ち滅す。世諦既に滅すれば還た本真に帰す。譬えば、清水の本性の際は静なるも外風を仮って漸く鼓撃して波浪有るに致る。風若し息めば還た本性に収まるが如し、と。今皆此の説に同じからず。具さには二諦義[5]中に広く今の述を破するが如し。但、今仏果を明すに内に非ず外に非ず、有為に非ず無為に非ず、待に非ず不待に非ず、摂に非ず不摂に非ず、豈定んで摂不摂と言う可けんや。故に肇師[6]の云く、涅槃の道たるや、寂寥虚広にして形名をもって得す可からず。微妙無相にして有心をもって知る可からず。之を言えば其の真を失[7]し、之を知らば其の愚に反る。之を有とせば其の性に乖き、之を無とせば其の軀を傷く。斯れ乃ち希夷の境、大玄の郷なり。而も有無の題榜[8]を以て其の方域を標し、神通を語る者は亦邈からずや、と。涅槃の体乃ち其れ此の如し。豈凡心を以て推度し、或いは二諦の内に在りと言い、或いは二諦の外に在りと言う可けん耶。

(三) 次に三徳を明せば、三法を明すに三種有り。一は三聚、二は三性、三は三徳なり。

(1) 三聚とは色と心と無作となり。今は此の名を釈さず。但、仏果に此の三を具すと為すや不や。成論師の解するに此れに三例有り。若し是れ心ならば則ち定

5 大乗玄論巻第一・二諦義・摂法第八に「第三治城解云。仏果為二真諦所摂一而非二俗諦一。所二以然一者。仏果是真実之法。無二復虚仮一挙体妙絶。故真諦。挙レ譬如下水本澄渟以二風潮因縁一故生二波浪一。若風息浪静還中復本水之清上。内合レ本唯真諦之理顕。煩悩之風起致二生死之浪一。生死既息。還二一真之理一。故大経云。世諦生死時名レ生不二生死一者尽也。不生死即是仏果。生滅言二世諦一。今並不レ同。」（大・四五・二二a—b）とある。二諦義巻下・二諦摂法義第六（大・四五・一一二c以下）には開善と荘厳の二説のみで第三の治城説を欠いている。これは本来二諦義にあった治城説が現存蔵経中に欠落したのか、或いはここにいう二諦義とはもともと大乗玄論二諦義を指すのかいずれかであろう。もし後者とすれば、本書の成立は玄論の後ということになる。

6 肇論・涅槃無名論第四「夫涅槃之為道也。寂寥虚曠。不可以形名得。微妙無相。不可以有心知。……（中略）……然則言之者失其真。知之者反其愚。有之者乖其性。無之者傷其軀。……（中略）……斯乃希夷之境。大玄之郷。而欲以有無題榜。標其方域。而語其神道者。不迹邈哉。」（大・四五・一五七c—一五八a）

7 原本に告とあるも肇論により失と改む。

8 原本に膀とあるも肇論により榜に改む。

んで無作有り、定んで色無し。一種は則ち多解有り。一に云く、仏果は乃ち麤色尽くれば則ち妙色有り。故に経[9]に云く、無常の色を捨てて常の色を獲得す、と。又六巻[10]に云く、妙色湛然として常安穏なり、と。又経[11]に云く、解脱に二体有り。一に色、二に無色なり。無色とは声聞の解脱、色とは諸仏の解脱なり、と。第二に云く、仏果は無色なり。色は是れ頑礙の法にして研磨すべからざるも、増進仏果の時は霊智独り存して色と無作と有ること無し。而も経にいう中道の妙色とは二義あり。一は能く応に無窮の色と為るべし。二は妙果顕然の故に、故に色と為す耳。故に六経[12]に云く、願くば諸の衆生一切の色を滅して無色の大般涅槃に入らんことを、と。地論[13]には三仏を明すに皆色有り。知るべし。身色を釈せば、経の如く一一の相、海無量の諸相に此の色有りと雖も而も見る可からず。地経には仏相好を説いて実報身と為す。法身の色とは如来蔵中色性の法門、成仏の体を顕現す。体は是れ色なりと雖も而も色相無し。比丘の無作の如し。是れ色性なりと雖も而も色相無し。又云く、法身は法を出生すれば則ち無尽の色像なり、と。又云く、無礙の色は無像並びに下地の因中に同じからず、と。心を論ずれば、無常の識を捨すと雖も常の識を獲得す、と。涅槃は以て体と為すに但心を体と為すなり。但心に三有り。一に六識心は外境を縁じ、二に七識心は内法を縁ず。此の二は皆滅す。唯第三の八識のみ唯真識の覚知なり。非色心を論ずる者は、生死の色心無きを亦非色心と名づくるなり。又、常に色至処を釈するに、成論師に凡そ四説有り。一は欲色両界には色有り。無色界には色無し。第二に云く、三界並びに色有り。三界の外は乃ち色無し。何んとなれば、六地已還は身上の分段に色土有り。七地已上は三界の外に出づれば復色無し。而も是の四、空無色とは麤色無き耳。第三に解して云く、六地は穢

9 南大般涅槃経巻第三十五憍陳如品第二十五之一「色是無常。因レ滅二是色一獲二得解脱常住之色一」（大・十二・八三八b）

10 法顕訳大般泥洹経巻第一大身菩薩品第二「妙色湛然常安穏」（大・十二・八五九b）

11 南本大般涅槃経巻第五三相品之余「迦葉復言。所レ言解脱為二是色一耶為二非色一乎。仏言。善男子。或有二是色一或非二是色一。言二非色一者。即是声聞縁覚解脱。言二是色一者即是諸仏如来解脱。是故解脱亦色非色。」（大・十二・六三二a）

12 六経は大経の誤りであろう。南本大般涅槃経巻第十四梵行品第二十之一「願諸衆生皆悉普得二無色之身一過二一切色一。得レ入二無色大般涅槃一。」（大・十二・六九七b―c）

13 慧遠大乗義章巻第十八涅槃義に「仏有三身。一是応身。二是報身、三是法身。此三身中皆悉有色。…（中略）…報身色者於彼応身一一相処各有無量塵数相好。如華厳経相海品説。雖具衆相而不可見。…（中略）…法身色者如来蔵中。色性法門顕成仏体。体雖是色而無色相。如似比丘無作戒法。…（中略）…又此法中出生法界無尽色。故名像色法。…（中略）…無礙是身。無礙是形。何為非色。又雖無礙而有光明諸根相好。何得非色。…（中略）…又地経中説。仏相好為実報身。…（中略）…次論心義。経中宣説。滅無常識獲得常識。涅槃用

国土地なり。二国の中間に猶影の如く光を知る色有り。八地已上は則ち復色無し。第四に解す。金剛心は則ち色有り。唯仏のみ色無し。而も界外の意生身と言うは、爾の時復一期の寿命無し。但念念の生滅のみ有るを名づけて変易と為すが故に意生身と云う耳。無作の一法は金剛に窮至するなり、と。

今明さく、皆然らず。若し仏果に定んで色有りと言わば則ち長短なるべし。質像に則ち処所有るべし。若し定んで無色ならば亦無心なるべし。何んとなれば、色は是れ心の依因なり。既に色有ること無ければ心何を所依とせん。色は是れ頑礙の故に須く離るべしと言わば、心は是れ無常なり、亦応に須く離るべし。又、心は是れ取相の法なり、亦応に須く除くべし。若し取相の心を転じて無相の心と為さば、亦応に頑礙の色を転じて無礙の色と為すべし。又、如来の無色を嘆じて色と為すべくんば、亦無心をも心と為すべしといわば、解して云く、心を体と為すに汝は何れの心を体と為すや。汝は麤心を捨てて妙心を以て体と為せば、麤色を捨てて妙色を体と為すべきなり。今明さく、若し一切は皆無なりと言わば、是の無は有に待せず。是の故に性の有たること無きも亦然なり。故に今の有は無に乖き、無は有を妨げず、有無自ら色心の無礙を立つるなり。

(2)第二に三性を顕わして体を明す。三性とは善悪無記なり。此の三を釈するに亦三例あり。善は一向に定んで有。悪は一向に定んで無。無記には復二解有り。第一に光宅[14]は仏果を明して二種の無記有り。一は知解無記、二は果報無記なり。知解とは射駆[15]を基るが如し。闡提にも亦有なるが故に善に非ず、仏地にも亦有なるが故に悪に非ず。故に無記性有るなり。果報とは生死中の苦無常の如し。釈するに既に悪に非ず、但是れ無記なり。涅槃の地の常楽我浄も亦是れ

心為体。…(中略)…今略論之心有三種。一是事識謂。六識心。向外取縁。二是妄識。謂七識心。…(中略)…三是真識。謂八識心。如来蔵中過恒沙法縁起集成覚知心事。」(大・四四・八一五b—c)とあるを参照。

14 光宅は光宅寺法雲(四六七—五二九)伝記は続高僧伝巻第五(大・五〇・四六三c)

15 弓を射ることと馬車を操縦すること。いずれも昔の男子の教養とされたもの。

善に非ず。並びに是れ無記なり、と。第二に開善と荘厳とは並びに是れ善にして復無記に非ずと云う。次に彼の二種無記の善を通ぜん。荘厳は知解は応に是れ善なるべしと明す。開善は三性に通ず。闡提は是れ悪、仏は則ち是れ善なり。果報は生死の中に多く異具有るが故に、果報は是れ無記なるべし。仏果は唯習果のみ有りて復報法無し。寧んぞ此れに類して是れ無記なる可けん、と。

今明す所の涅槃の体は、善に非ず不善に非ず、記に非ず不記に非ず、一定の相無し。善巧方便して所として是れ善・不善ならざるは無し。有る時には不善に対せんが為に復是れ善なりと道うが如し。故に云く、諸悪已に断じ衆善普く会す、と。

(3)第三に三徳を明せば涅槃は乃ち万徳を具す。而も経文には略して三徳を言う耳。但従来三徳を教うに凡そ三師有り。第一に荘厳の云く、法身は其の体を語り、般若と解脱は其の用を明す。勝れたるは多きこと難し、智断を出でず。般若は智、解脱は断、体、智断を具するが故に三と言うなり、と。第二に開善の云く、昔日の二種涅槃に対するが故に三徳を言う。昔日の有余は身智解脱に在りと雖も未だ具せず。今日の身智は在時に解脱し已つて具す。則ち是れ彼の有余を斥するなり。昔の無余は子果累尽して解脱乃ち具するも而も復身智無し。今解脱の具する時を明して、而も身智有れば則ち彼の無常を斥すなり、と。第三は二解を合して両義を合用す。直ちに今の教を論ぜば荘厳の如し。若し今昔に対せば則ち開善の如きなり。

今明さく、無所得の若きは因縁仮説なれば法として得ざること無し。但此の三釈は文の証拠無し。真に是れ義推なり。今謂うに此等は各妨難有り。所以に具さに論ずべからず。初家に凡そ両難有り。一は三徳の本を明すに共に涅槃の

体と為らん。云何但法身のみを以て体と為すや。又且く法身も亦用と為すことを得ん。豈智断偏えに用と為すと謂う耶。若し身は是れ体の異名なるが故に法身を以て体とすべしと云わば、下文に云[16]く、涅槃は解脱に名づく、と。応に解脱を以て名づくべし。而るに今解脱を以てせずして、当に那んぞ忽ちに法身を以て解すべきや。二には文中自ら道うこと縦にして亦別異を成ぜず。亦三法を成ぜず。曾て縦横の異無し。豈体用の殊有らん耶。若し体用有れば本末有り。若し本末有れば則ち劣と及び結と有り、云。次に復の解を難ぜん。若し昔の涅槃を斥するが故に三徳と言うと言わば、此の名数は殊に相主対せず。邪の三宝を破せば則ち正の三宝を言うが如し。今二涅槃を破せば二徳を明さん。又法身般若を以て無余を斥せば、亦応に解脱常住を以て彼の有余を斥すべし。何んとなれば、昔日の有余は何んぞ但解脱のみ未だ足らざらん、亦常住に非ず。今若し正しく解脱を言いて常住を言わざれば、亦応に無余は正しく法身を言いて般若を言わざるべし。第三は具さに両釈を用うれば具さに二難を招くなり。

今明さく。真に是れ教門は不同なるが故に偏えに具す。昔日は具説すること堪えざるが為に方便して偏えに一解脱を説く。今は大心発るが故に三徳円伊の涅槃を説く。興皇師の云く、感として応ぜざること無きが故に法身と云い、境として照さざること無きを名づけて般若と為す。累として尽さざること無きが故に解脱と云う、と。又三徳を明すは如来の三密を開かんが為なり。故に迦葉[17]の問う。願くは仏微密を開き広く衆生の為に説きたまわんことを、と。此の如き三密は並びに四相品に是れあり。亦是れは凡夫の三業に対す。凡夫の三業は密ならざるが故なり。又[18]生死の三障に対せんが為に涅槃の三徳を明す。報障に対して法身を明し、業障に対して解脱を明し、煩悩障に対して般若を明す。生

16 南本大般涅槃経巻第五四相品之余「涅槃名二解脱一」（大・十二・六三六a）

17 同「爾時迦葉菩薩白レ仏言。世尊。如二仏所説一。諸仏世尊有二秘密蔵一。是義不レ然。何以故。諸仏世尊唯有二密語一無レ有二密蔵一。譬如二幻主機関木人一。人雖レ覩二見屈伸俯仰一。莫レ知二其内一而使二之然一。仏法不レ爾。咸令三衆生悉得二知見一。云何當レ言三諸仏世尊有二秘密蔵一。仏讃二迦葉一。善哉善哉。善男子。如二汝所レ言。如来実無二秘密之蔵一。（後略）」（大・十二・六三〇b―c）の取意。

18 勝鬘宝窟巻上本「北土諸師云。夫涅槃以対二生死一。生死有レ三。一果報身。二業。三煩悩。対二生死報身一故説二法身一。対二生死業一故説二解脱一。対二生死煩悩一故説二般若一。」（大・三七・一四c）とあり、これが北土説具体的には慧遠説であると明している。慧遠大乗義章巻第十八涅槃義（大・四四・八二〇b）参照。

死は只三障なるが故に涅槃に唯三徳のみあるなり。

(四) 次に四法に約して明さん。亦体は即ち是れ四徳なり。此の徳は亦定まり無し。或いは一円、是れ妙有なり。有る時は二、即ち妙有と及び我とを明す。有る時は三徳を明す。三修法に隣するなり。四には五徳は彼の五門に対すと解す可し。有る時は八徳即ち八味なり。一徳に二行有り、二徳に四行有り、三徳に六行有り、四徳に八行有り、五徳に十行有り、八徳に十六行有るなり。三双有り。生死と涅槃に行解を明す。生死は無常に在るを行解と為す。涅槃は楽を行と為す。此の八の行解に乃ち涅槃の四徳を得るなり。二に因果を明す。因は無常に在り、果は常楽我なり。三は本迹に約す。迹は無常に在り、本身は常楽我なり。八味とは開善は四徳を八味と為す。謂く、一に常、二に恒、三に安、四に無垢、五に不老、六に不死、七に快楽、八に清涼なり。[19] 開善は恒と為し河西は常と云う。常と恒とは名異なり義一なり。縁より生ぜざるを常と為し、始終真実なるを恒と為す。楽を開いて安と為す。内に悩無きを楽と為し、外に危ならざるを安と曰うなり。不老不死是れ我なり。我なるが故に老いず、我なるが故に死せざるなり。清涼と無垢は並びに是れ浄の義なり。涅槃に復八相有り。文に云うが如し。好体は五門に対して応に五徳を明すべし。但不浄観は初に在りて聖人は為さざれば但四倒のみ有り。四徳は四倒に対するが故に四行四徳を明すなり。又四人に対して四因四徳を明す。四人[20]とは則ち闡提と外道と声聞と縁覚となり。四因とは謂く、信心と般若と虚空三昧と大悲となり。闡提の不信を破して信を明す。信なるが故に浄徳を得るなり。般若は外道に対す。外道は我人の一異に著す。般若の正慧は一異の我心を破するが故に般若を明す。故に真我の徳を得るなり。虚空三昧は声聞の苦無常を厭うを破す。厭う可きに在る

19 八味説に関しては南本大般涅槃経巻第四名字功徳品第六「大般涅槃亦復如レ是八味具足。云何為レ八。一者常。二者恒。三者安。四者清涼。五者不老。六者不死。七者無垢。八者快楽。是為二八味一。具二足八味一。是故名為二大般涅槃一。」(大・十二・六二五a)参照。また灌頂大般涅槃経疏巻第八に「八味者以譬二四徳一。開レ常出レ恒。不レ為二縁生一故常。不レ為二縁滅一故恒。開レ楽出レ安。外無二能壊一為レ安。内無二所受一為レ楽。無垢与二清涼一同皆是浄。不老不死同皆是我。」(大・三八・八六a)とあるは吉蔵説に酷似している。

20 勝鬘宝窟巻下末に「言二四因一者。如二宝性論説一。一者信心。除二闡提謗法一。得二仏真浄一。二者波者。除二外道著我一。得二仏真我一。三者三昧。以二空三昧一。除二声聞畏苦一。得二仏真楽一。四者大悲。常二随衆生一。除二辟支捨心一。得二仏真常一。以二斯四義一。故立二四種一也。」(大・三七・七八b)とあるように四因四徳に関しては究竟一乗宝性論巻第三(大・三十一・八二九a—b)に依っている。

21 大般涅槃経巻第二十三光明遍照高貴徳王菩薩品之五「諸仏如来有二二種楽一。一寂滅楽一。二覚知楽。実相之体有二三種楽一。一者受楽。二寂滅楽。三覚知楽。仏性一楽以二当見一故。得二阿耨多羅三藐三菩提一時名二菩提楽一。」(大・十二・七五七b)

22 同巻第二十一徳王菩薩品之三「以二四楽一故名二

が故に三昧を得、三昧なるが故に楽徳を得るなり。大悲は縁覚に対す。縁覚は無常の果に著し、永に入滅して大悲無きが故に、大悲は無常を破して常徳を得るなり。四人に対せんが為に四因を明す。故に四徳を釈するなり。但此の四徳は大経に其の名数を辨ずること同じからず。常は別の名数を見ず。直ちに常を明す。二は恒耳。但無常に二種有り。一は生滅、二は流動なり。生滅に対するが故に常と言い、流動の故に恒と言うなり。楽の名数同じからず。経[21]に云く、仏に三楽あり、と。謂く覚知の楽と及び寂滅の楽と実相の楽となり。三楽には愛楽無し。仏性は一楽なり、謂く菩提の楽なり。復[22]四楽有り。一は断楽、若し不断の楽ならば還って有断を成ず。断楽に在るが故に大楽と名づく。二は寂滅楽。三は一切智楽なり。若し知らざれば則ち苦[23]なり。一切智の故に楽なり。四は身不壊の故に楽なり。我に八自在有り。義は経[24]の如し。浄に四種有り。一に有浄。二十五有を離る。二に門楽浄。凡夫の一楽は不浄なり。三に身浄。身の無常は不浄なり。四に心浄。心に漏有れば則ち不浄。無漏なるが故に浄なり。

第五章　涅槃の用を明す

次に第五に涅槃の用を明さん。此れに就いて亦二義有り。一に照境の用を明し、二に発智の用を明す。

(一)—(1)今第一に本有の用を明す。但、前に已に略して本有義を明せり。此の義未だ顕われず、今更に広く之を明さん。然るに古来三解有り。第一に霊味[1]の高高は生死の中に已に真神の法有り。但、未だ顕現せざること黄金を蔽うが如しという。如来蔵経[2]に云く、人弊帛に黄金の像を裹み泥中に堕するに人の知る者無し。天眼を得る者有り。提げて浄洗すれば則ち金像宛然たるが如し、と。真

大涅槃。何等為レ四。一者断二諸楽一故。…(中略)…二者大寂静故名為二大楽一。…(中略)…三者一切知故名為二大楽一。…(中略)…四者身不レ壊故名為二大楽一」(大・十二・七四七a)

23　原本に若とあるを苦に改む。

24　南本大般涅槃経巻第二十一「云何復名為二大涅槃一。有二大我一故名二大涅槃一。涅槃無我大自在故。名為二大我一。云何名為二大自在一耶。有二八自在一則名為レ我。何等為レ八……(後略)」(大・十二・七四六b—c)等参照。

1　原本に霊味の高高とあるも霊味の宝亮の誤りか。大般涅槃経集解巻第一「衆生既蒙昔教以習心。便稍渉虚以入道。体常無常。二輪雙徹。驚生死為不有之有。涅槃為不無之無。既安真悟理。識苦空而断迷。自非修行入道発理縁之知。則煩惑不遣。生死難除。故今教之興。開神明之妙体也。辨生死以二苦為本。明涅槃以常楽為源」(大・三七・三七八b—c)

2　大方等如来蔵経「復次善男子。譬如有人持真金

神も亦爾なり。本来已に常住の仏体有り、万徳宛然たり。但煩悩の所覆と為る。若し煩悩を断ぜば仏体則ち現ずるなり。次に鄣安[3]の瑤師有り。云く、衆生に成仏の道理有り。此の理是れ常なるが故に此の衆生を説いて正因仏性と為す。此の理衆生に附するが故に説いて本有と為すなり、と。第三に開善に具さに二義有り。一は本有、二は始有なり。更に二体無し。但両義を将って之を成定する耳。神明有らざることを明さんと欲す。定んで若し神明有れば則ち本来当果の理有り。此の本有の義は但万行円満し、金剛心謝して種覚起るの時に約して、名づけて始有と為す。大経[4]に具さに二文有り。貪女の宝蔵、力士の額珠、闇室の瓶、瓮井中の七宝の如し。本より自ら此れ有り。本有を証するの文は下の師子吼[5]及び迦葉品[6]中に皆乳酪を以て譬と為す。乳中に酪無きことを明す。但酪は乳従り生ずるが故に酪有りと言う。又云く[7]、仏性は三世の摂に非ず。但衆生は未だ聚まりて清浄の身を荘厳せざるが故に仏性は未来に在りと説く。此れは則ち始有を証するの文なり。故に知んぬ、仏性には具さに両義有り。若し定んで木石の流ならば之を成ずるの理無し。此の衆生必ず作仏すべければ則ち本有の義なり。若し仏に於ては則ち今の利は是れ因中にあり。因中未だ果有らざれば則ち始有の義なり、と。

今並びに同じからず。且く第一の義を破せん。若し定んで本有の真神あれば則ち僧佉[8]に同じうす。又若し因中に已に有れば則ち乳を売りて酪価を求め、草馬を貨して駒の直きを索むるが如し。又真神の力大なれば、何れの意にて煩悩中に住して煩悩を排して出づる能わず、修道断惑を待って乃ち出づるを得る耶。第二義の解を破せん。若し得仏の理已に自ら是れ常ならば、則ち衆生の身中に已に常住の法有らん。還って常見の執を成ぜん。真神の法に非ず。若し此

像。行詣他国経由険路懼遭劫奪。裹以弊物令無識者。此人於道忽便命終。於是金像棄損曠野行人践蹈咸謂不浄。得天眼者見弊物中有真金像。即為出之一切礼敬。」（大・十六・四五八c）

3 大般涅槃経集解巻第十八「法瑤曰。……今明善業所由生者。即仏性。仏性是生善之理。理若無者。善何由生。是則仏性。是作善業之根本女。仏性是正因。善業是縁因也」（大・三七・四四七c）同巻第十八「法瑤曰。衆生有成仏之理。理由慈惻。為女人也。成仏之理。於我未有用。譬貧也。」（大・三七・四四八c）等を参照。

4 南本大般涅槃経巻第三十一迦葉菩薩品第二四之一「善男子。我復説。衆生仏性猶如貧女宅宝蔵。力士額上金剛宝珠。転輪聖王甘露之泉」（大・十二・八一五c）また同巻第十九にも「善男子。如闇室中井種種七宝……（後略）」（大・十二・七三五b）

5 南本大般涅槃経巻第二十六師子吼菩薩品之二「仏言。善男子。我亦不説乳中有酪。酪従乳生故言有酪。」（大・十二・七七五b）

6 同巻第三十二迦葉菩薩品之二「世尊。如世人説乳中有酪。是義云何。善男子。若有説言乳中有酪是名執著。若言無酪是名虚妄……」（大・十二・八一九c）

7 同巻第三十一迦葉菩薩品第二十四之一「仏性是

の理常無ければ則ち本有の義を成ぜず。次に第三の開善の解を破せん。二義を具す。汝が言う常住の法は常有・始有ならば、亦常住の法は曾て有り今有るべし。若し曾て有り今有れば則ち三世に堕し無常を成ぜん。反詰の云なり。又難ぜん。若し常住の法に復始有の義有らば亦応に無常の法なるべし。応に本有の義無かるべし。若し無常の法ならば但始有のみありて本有無ければ、則ち常住の法ならば但是れ本有にして始有無きなり。又常住の法に二義を具すとは、何れの因の所のみ本有の義の須いるのみぞ。因了じて始有の義を出だすに復何の所感と為すや。若し別因無ければ則ち別有無かるべし。既に二有有れば則便ち両因有り。若し生因従りすれば則ち無常なり。

今涅槃を明すに、未だ曾て本にもあらず、亦曾て始にもあらず。本を破せんが為の故に始と道い、亦洗わんが為の故に本到って則ち顕わると云う。道は本始に非ず、本始に非ざるは並びに是れ方便なり。

(2)第二に照境の用に又二あり。初めに俗境を照らし、次に真境を明す。今先に俗境を明す。明さく、俗中に流動の□法去来し、今仏智の作有り。若し照を為し若し境を逐れば去来有り、則ち仏無常を知りたまう。若し境を逐らざるに境去来すれば則ち境と摂せず。故に彭城法師[9]此の難を為すが故に果を明すに乃ち大期なし、生滅有り、念念に流動して境を逐りて去来す、と。此の解不可なり。故に経[10]に云く、若し如来は無常なりと言わば舌則ち堕落せん、と。此の師現世に舌口中に爛るなり。彼の師尋ねて改悔し、懸高堂の譬[11]を作す。鏡高堂に在り、万像鏡中に現ずるが如し。像に去来有り、鏡に生滅無し。此の解を作すと雖も猶難を免れざるに在り。鏡は是れ無情、知は是れ霊識なり。又且く鏡は是れ無常なり。云何が常住の智に譬うるを得んや。第一に京師の云く、知体は是

8 常三世不レ摂」（大・十二・八〇八c―八〇九a）
原本に僧法とあるも僧佉の誤り。僧佉は sāṃkhya（数論派）の音写語。

9 釈僧嵩、伝記は高僧伝巻第七道温伝の末に「時中興寺復有二僧慶慧定僧嵩一並以二義学一顕レ誉（中略）嵩亦亦明二数論一。末年僻執謂仏不レ応二常住一。臨終之日舌本失爛焉。」（大・五〇・三七三a）

10 南本大般涅槃経巻第五四相品之余「若有レ人言二如来無常一。云何是人舌不二堕落一」（大・十二・六三一b）

11 懸鏡高堂の譬は中論疏記巻第一（日本大蔵経・一六〇・上）にもあり。

れ常、用は則ち無常なり。無常なるが故に境を逐って去来す、と。此れ亦不可なり。豈如来の体は是れ無為にし用は得れ有為なりと分つことを得んや。経[12]に云く、正しく見る者は応に如来は定んで是れ無為なりと説くべし、とあるが故なり。第二に光宅師も例解を作す。如し今無常の智を以て常住の法を照せば、智は既に境の常に同じからざれば、亦常住の智を以て無常の境を照すに豈境の無常を逐るべけん耶。第四に復一解有り。九照境の義を作す。此の智は未来を照すと雖も復常に現在なるべき、常に過去なるべきの義有り。我皆照し竟んぬ。所以に不生不滅なり、と。此の解不可なり。向に未来に在る時当に現在なるべきを明す、未だ正現在せず。今遂に正現在を成ずれば則ち正現在を作す。当知の息と不息を照さん耶。若し息を便ち生滅と為さば不息に何んぞ此の理有らん。当知の不息は只当知のみ有り、現在知無きなり。第五に逆照の義を作す。明さく、如来は道成じ正覚の時一念に併びに逆照し竟んぬ。後境自ら去来す。知んぬ新知にあらざることを。天子の初めて登極の時の如し。併びに作制して中に在り。復人の犯す者は堕種して重く之を治するも復制せず。仏智の境を照すも亦爾なり、と。此の義も亦不可なり。仏智の境を照すに何ぞ曾て暫くも息めん。而して成道の時に照して後時には照さずと言わん。此の如きを縦(ゆる)さば終に境と相抜せざるなり。第六に横竪の照の義を明す。明さく仏因に在るの日、道初に心已に能く横に照し、数(しばしば)照し、次いで初地に入れば則ち能く一念の中に横に百法を照し竪に百時を照す。乃至二地より時を干して仏地に至れば万法万時に又虚空の譬を作す。物空中に在り、物に生滅あり空に去来無し、と。此れ亦不可なり。虚空は無智、仏果は霊智なり。豈喩とすることを得ん。今如来の智慧を明すに、寂滅凝遠にして常無常に非ざるに能く常たり無常た

12 南本大般涅槃経巻第二純陀品第二「是故不レ応三宣二説如来定是有為定是無為一。何以故。若正見者応レ説二如来定是無為一。」（大・十二・六一三c）

り。生滅非生滅に非ざるに能く生滅無し。無照にして照、照にして所照無し。

次に真の義を明さん。但古来二解有り。第一に開善の明さく、知は真を照せば即ち冥と一なり。復境智の異なる無し。爾る所以は智体は既に妙に湛然常寂なり。境と殊ならず。但、徳に約して辨ずるに自ら三句有り。一に凡夫は冥せず会せず。二に因中の聖人は会して冥せず。三に仏果は亦は冥じ亦は会するなり。第二解は此の説に同じからず。仏知は是れ霊智の智、真諦は是れ無智の境なりと明す。両体既に殊なり。豈此の有智の法を研して無知の境に同ず可けん。但、之を会すること既に極まるを詔づけて冥と為す耳。豈冥の会に異する有るを得ん耶。然るに経中に亦冥会の言有り。故に慧印三昧経[13]に云く、冥も寂なり不冥も寂なり、と。肇師[14]の論中に多く、冥真の体は寂にして利成ず、境相定んで異なりと言うも豈冥と言い会と言うを得んや、という。今境智は未だ曾て一にあらず、亦復異ならざるを明す。故に影師[15]の云く、内外並びに冥じ縁智俱に寂なり、と。

(二) 次に仏果涅槃の発智の用を明さん。問う。仏果涅槃は当に漸知すべしと為すや、当に頓知すべしと為すや。古来の解同じからず。真諦を挙して対して明すに凡そ三説有り。一に云く、二種皆頓智す。漸見すべからず。何んとなれば、理既に万惑の外に在り。一両分を除くと雖も終に理を見ず。要らず須く惑を除き理を尽くして方に見るべきなり。十重の紙紙裹[16]物は九重を徐くも終に見ず。除くこと尽きて方に見る、と。第二解の云く、二種皆漸知す可し。故に漸備経[17]に一切の智慧は皆漸漸に満足すと明す。豈一朝にして併悟す可けん耶、と。第三に解して云く、仏果は頓知、真諦は漸知するを得べし。爾る所以は真諦は則ち俗の空なり、更に遠物に非ず。所以に智慧を得ること即ち分知すべ

13 仏説慧印三昧経「亦非冥。亦非不冥……寂復寂」（大・十五・四六一c）

14 肇論・般若無知論第三の取意であろう。

15 出三蔵記集巻第十一・曇影中論序第二「至人以無心妙慧而契彼無相虚宗。内外並冥。縁智俱寂。」（大・五五・七七b）

16 裹→裏

17 竺法護訳漸備一切智徳経（大・十・四五八a、No. 285）の取意。

し。仏果の智は生死の外に出づ。所以に漸知すべからず、と。

今謂く、此の解は皆不可なり。初めに皆頓知不可と云うは、汝既に都て未だ理を見ず。亦応に都て未だ惑を断ぜざるべし。若し少分に惑を断ずれば則ち応に少分に理を見るべし。又且く理を見ざれば則ち智慧無し。智慧無くんば以て惑を除く可けん耶。次に皆漸知不可とは、理を明すに若し分有らば分知するを得べし。理既に通じて同じく分無し。那んぞ分知すべきや。又責めん。初地に真を見ば、以て理に称うとや為ん、理に称わずとや為ん。若し已に理に称えば二地と何んぞ異ならん。若し未だ理に称わざれば何ぞ理を見ると謂わん。第三家は具さに二難を招ず、又且二語自ら相反するが故に不可なり。今明さく、至理すら尚頓漸無し、豈頓漸の知有らん。頓漸無しと雖も亦は頓亦は漸なり。故に経[18]に云く、発心と畢竟と二にして別ならず、と。華厳に云[19]く、初心の菩薩と三世の仏と等しく、而も復漸漸知の義有り。五十二地の不同有り。初地は百法、二地は千法の故なり、と。

第六章　総じて問答料簡す

第六に総じて問答料簡す。此の涅槃に三本有り。雙巻[1]と大本と及び六巻となり。説者不同なり。雙巻有るは是れ小乗経なり。二は是れ大乗なり。或いは同座異聞と云う。故に広略の差別あるなり。有が云く、翻に広略有り、と。多くは爾るべし。法顕は大本の上帙を得て、翻じて六巻と為すが故なり。

涅槃経遊意　終

18　南本大般涅槃経巻第三十四迦葉菩薩品之余「発心畢竟二不レ別」（大・十二・八三八a）

19　仏駄跋陀羅訳大方広仏華厳経巻第九初発心菩薩功徳品第三「此初発心菩薩即是仏故。悉与二三世諸如来一等。亦与二三世仏境界一等。悉与二三世仏正法一等。」（大・九・四五二c）。同巻第二十三十地品第二十二之一「漸次具二諸地一得二以成二仏道一」（大・九・五四四a）。同「菩薩若捨レ国仏法中出家勤二行於精進一即得二百三昧一能見二百諸仏一震二動百国土一光明照二百国一飛行亦如レ是化二百土衆生一入二於百法門一念二知百劫事一示二現於百身一能以二百菩薩一眷属而示現若以二其願力一過二是数一無量今明二初地義一」（大・九・五四八b）。同巻第二十四十地品第二十二之二「若欲下捨二王位一出家行上学道上勤心行二精進一得レ入二千三昧一得レ見二於千仏一供養聴二受法一菩薩住二此地一能示二如レ是事一（後略）」（大・九・五五〇c）の各文の取意。

1　雙巻は西晉白法祖訳仏般泥洹経二巻（大・一・一六〇No.5）大本は北涼曇無讖訳大般涅槃経四十巻（大・十二・三六五No.374）六巻は東晉法顕・仏陀跋陀羅共訳大般泥洹経六巻（大・十二・八五三No.376）を夫々指す。